

ユリアヌス帝の変貌

— 「背教者」から「哲学者, ローマ皇帝」へ (1)

The Emperor Julian: “The Apostate” To ” The Philosopher, Roman Emperor”

添 谷 育 志

Julian has always been something of an underground hero in Europe.

His attempt to stop Christianity and revive Hellenism exerts still a romantic appeal, and he crops up in odd palaces, particularly during the Renaissance and again in the nineteenth century.

Gore Vidal, *Julian: A Novel*, 1962 (Vintage International Edition, 2003.)

はじめに

本稿は辻邦生『背教者ユリアヌス』^(註1)において描かれたローマ帝国皇帝フラウィウス・クラウディウス・ユリアヌス (Flavius Claudius Julianus. 在位: 361年11月3日-363年6月26日) が、時代の変化にともないどのように変貌してきたのかをたどるものである。彼は同時代人のあいだでも「文人皇帝」(アンミアヌス・マルケリヌス, エウナピオス) として評価される一方で、圧倒的多数によっては「背教者」あるいは「過る哲人王」として軽蔑と非難さらには攻撃の対象になってきた。たとえばラテン・キリスト教最大の詩人でありユリアヌス帝の同時代人だったプルデンティウス (Aurelius Prudentius Clemens. 348-410? 年) はその1084行から成る長編詩「崇神^{アポテオシス} (ラテン語原題 Apotheosis: 英訳 The Divinity of Christ: A Hymn on the Trinity)」においてつぎのように書いている^(註2)。

けれどもわたしが少年だったころに、あらゆる皇帝のなかで
ひとりの人物がいたことを、わたしは憶えている。
彼は戦いにおいては勇敢な指導者、立法者であり、
弁舌と行動でよく知られていた。彼はわれわれの国の繁栄には
気遣いをおこたらなかったが、真の宗教の維持についてはそうではなかった。
というのも彼は30万もの神々を信仰したからである。唯一の神にたいして
は不忠実だったが、この世にたいしては誠心誠意を尽くした (Prudentius, "The
Divinity of Christ: A Hymn on the Trinity:450", in: *Prudentius, Loeb Classical Library*, vol.
1, p. 155.)

マニ教からの回心をへて、北アフリカはヒッポの司教の座にあった初期キリ
スト教最高の聖人アウグスティヌスでさえも、ユリアヌスの「抜群の才能」は
認めざるをえなかった。410年ゴート族の侵入によるローマ陥落を契機として
噴出した異教徒によるキリスト教への非難にたいする応答として、彼は大著『神
の国』を執筆した。そこではこう書かれている。

個々の皇帝にわたって言及する必要を省くため〔最後に言いたい〕、キリス
ト者のコンスタンティヌスに〔権力を与えた〕神は背教者ユリアヌスにも〔そ
れを与えられたと〕。ユリアヌスは抜群の才能をもっていたが、それを冒瀆
的で忌むべき好奇心が支配する愛のゆえに欺いたのである。〔つまり〕虚偽
の神託を彼は信じ込み、勝利の確実性に信頼して〔軍隊に〕必要な食物を運
んでいた船に火をつけた。それから彼は極端な冒険をおかし激しく攻撃を加
えたが、その向こう見ずの報いとして間もなく殺された。軍隊は敵地に取り
残されてしまい、わたしたちが前巻で述べたあのテルミヌス神のみ告げに反
して、ローマ帝国の国境を変更しなければ、敵地から脱出することができな
い羽目になったのである。つまり、ユピテルには屈しなかったテルミヌス神

も、必然性には屈したのである（『神の国（1）』第五巻，第二章，『アウグスティヌス著作集 第一一巻』，赤木善光ほか訳，教文館，1980年，372頁。傍点は引用者）。

ヨーロッパにおけるキリスト教の浸透・拡大，教会制度の確立，教皇権の増大にともなう「暗黒の中世」では，ユリアヌスはますます一方的に「悪の化身」（Robert Browning, *The Emperor Julian*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press.1976. p. xi.）とみなされるようになった。それどころか13世紀に活躍した神学者トマス・アクィナスの——「君主の鑑」と称されるジャンルに属する——『君主の統治について—謹んでキプロス王に捧げる（*De Regimine Principum, Ad Regem Cypru*）』（柴田平三郎訳，慶應義塾出版会，2005年）においては，カエサル，オクタウィアヌス・アウグストゥス，キケロ，セネカ，ティベリウス帝などは登場するものの，ユリアヌスの影も形もないのだ。ユリアヌスゆかりの地ガリアについては，「またユリウス・カエサルがその書『ガリア戦記』において語っているように，ガリアにおいてはキリスト教の聖職者たちが非常に尊敬を払われるようになっていたので，ガリアの民の間にあっても，ドルイダスと呼ばれていた異教徒の聖職者たちが全ガリアに法律を制定することを神は許したのである」（同上，邦訳，80-1頁）と書かれている。さらには「多くのローマ皇帝たちがキリストの信仰を暴虐にも迫害したとき，大多数の人びとは貴族も平民も信仰に殉じ，抵抗を試みることはなく，キリストのために従容として死に就いたことで讃えられたのである」（同，37頁）と書かれてはいるが，ここにはユリアヌス帝もふくめてローマ皇帝たちが一時的にせよ，キリスト教徒にたいしておこなった寛容政策についてはまったくふれられていない。

けれども，ユリアヌスの人格と偉業はけっして忘れ去られはしなかった。彼の著作や書簡，彼の終生の盟友だったアンミアヌス・マルケリヌスの『歴史』が焚書にもあわずに生き延びられたのは，キリスト教会が彼らをそれなりに評価していたことの証左にほかならない（アンミアヌス『歴史』については小坂俊介

「アンミアヌス・マルケリウス『歴史』に関する近年の研究動向」Studio Classica 3, 2012.を参照)。じじつ14世紀には48通にのぼるユリアヌスの書簡が「ギリシア語散文の模範」として出版されている。けれどもローマ帝国の礎であるイタリア半島にあって、当時の分裂状態を克服して統一国家イタリアを夢見ながら、俗語（トスカーナ語）によってダンテが書いた国民文学『神曲』（14世紀、ただしDivina Comediaという書名が定着するのは1555年のヴェネチア版以降）に描かれた地獄のどこにも彼らの姿はないのだ。教会にとっての仇敵ともいうべきエピクロスでさえ「地獄の第六獄」にいる——「こなたにはエピクロとかれに倣ひて魂を體とともに死ぬるとする者みな葬らる」（山内丙三郎訳、岩波文庫（上）、64頁）——というのに、またソクラテス、プラトン、アリストテレスたちは「第一獄」で「キリストを信ずるにいたらざりし無辜の民」として、いわば「不遑及の原則」に則して優遇されているのに、さらには死に際してキリスト教徒に改宗した叔父コンスタンティヌス大帝でさえ「偽りの謀めぐらす者」として「第八獄」に閉じ込められているというのに、ユリアヌス帝の姿はどこにもないのだ。そもそもダンテが描く『神曲』の「地獄」にも「煉獄」にも「背教者」というカテゴリーは存在しない。中世における悪魔的ユリアヌスや後述するルネサンスの英雄的ユリアヌス像の双方から距離をとった学術的研究の基礎となるユリアヌス自身の著作や、アンミアヌス、リバニウスなどの著作が印刷・出版されるのは17世紀以降のことである（cf. Browning, *ibid.*, P229. ff.）。

じじつJ・H・ビュアリは『思想の自由の歴史』（森島恒雄訳、岩波新書、1951年）の第三章「幽囚の理性」においてこう書いている。

その短い治世中（三六一―六三年）に古い秩序を回復しようとした背教者ユリアヌスは全面的な信教寛容を宣言した。しかし彼はキリスト教徒が学校で教えることを禁じ、キリスト教徒を不利な地位においた。が、それもほんの一時的な抑圧にすぎなかった。そして結局、テオドシウス一世（四世紀末）の

厳しい法律によってついに異教は粉碎された。その後も一世紀以上の間異教はあちこちで、とくにローマとアテナイでなお余命を保ちはしたが、あまり勢力はふるえなかった…(中略)…中世期の暗黒を一掃し、ついに理性をその牢獄から解放しようとする人々のための道をひらくことになる知的・社会的運動は、一三世紀のイタリアにはじまった(同書、42頁、56頁)。

そしてついに1417年にローマ教皇庁書記官長でありブックハンターだったポッジオ・ブラッチョリーニによって、エピクロス哲学の精髓をラテン語韻文で表現したルクレティウス『事物の本質について (*De Rerum Natura*)』の写本がドイツの修道院図書館で発見された(スティーヴン・グリーンブラット『一四一七年、その一冊がすべてを変えた』河野純治訳、柏書房、2012年を参照)。フィリップ・ソレルスは素晴らしいエッセイ「ルクレティウスの瞑想」においてこう述べている。「わたし(ルクレティウス—引用者補足)という人間はすでにこの世に現われ、人生をきたのだ。わたしはものを考え、文字を描いたことがあるのだ。ただ、それがまったく記憶に残っていない。記憶がないのは、わたしと、もうひとりのわたしが、死によって完全に断ち切られているからだ。かつてのわたしがあの賛歌を書いたとき、どの国の言葉を使ったのだろうか? わからない。どの国の言葉で、また未来のどのような風景のなかで、おなじ賛歌をふたたび、しかもこのわたしの手によって書かれるのだろうか。そのときのわたしは、いまのわたしのことを何ひとつ覚えていないはずだ。予測など不可能なことだ。すくなくとも、いまとおなじ文字が使われるのだろうか。ローマはローマにあるのだろうか? ウェヌスの秘密を知る人間が残っているのだろうか」(『例外の理論』宮林寛訳、せりか書房、1991年、17頁)。「ウェヌスの秘密を知る人間」はたしかに残っていたのだった。

もとよりポッジオによる写本の発見は偶然の賜物だろう。だがそれが現代にまで受け継がれたのは「テキストの擁護者たち」が存在していたからである。

あるテキストは自然のなりゆきで「古典」になるわけではない。そこにはなにを後世に遺すべきか、なにを葬り去るべきかをめぐる熾烈な選別と排除の力学がはたらいていたのであった。たとえばギボンも『ローマ帝国衰亡史』執筆に際して参照した、偽作とのいわくつきの『ローマ皇帝群像 (*Historiae Augustae*)』(邦訳、全四巻、京都大学学術出版会)を1603年に集成したフランスの新教徒アイザック・カゾボンが所蔵していたルクレティウスの著作の余白には「その文体の美しさへの感嘆と、その不敬な考えを呪う言葉にみちている」という。

ルクレティウスよ、お前はなんと愚かなのか、虫ケラと人間が魂の種を同じくしていると信じているのか！

たしかに、カゾボンが許容できる異教徒もいた。「自然は無駄なことをなにもしない」とするアリストテレスの学説は、「世界は自然によって、無作為に目的をもたず、みだりに創造されたものだ」というエピクロスのガラクタよりもずっとすぐれている(アンソニー・グラフトン『テキストの擁護者たち—ヨーロッパにおける人文学の誕生』福西亮輔訳、勁草書房、2016年、277-8頁)。

けれどもエピクロス自身が「地獄の第六獄」から救出されるには、17世紀のピエール・ガッサンディの登場までまたなければならなかった(中金聡「エピクロスの帰還—ガッサンディにおける哲学的著述の技法について—」『国士舘大学政治研究』第2号、2011年を参照)。こうした人文学者たちの努力によって拍車がかかったルネサンス、すなわち古典古代の復興——キリスト教徒にとっては異教の神々の復活——は、フィレンツェではマキアヴェリによるローマ共和政の再評価をうながし、またメディチ家の文人政治家ロレンツォは1491年に、ユリアヌスを主人公とする戯曲 *Rappresentazione di san Giovanni e Paolo* (A Play of Saint John and Paul: 英訳版なし) を発表することになる^(註3)。そしてルターとカル

ヴァンによる宗教改革においては、かつてユリアヌス帝を目の敵にしたカトリック教会自体がプロテスタントからの厳しい批判を受けることになる。じじつルターの『現世の主権について』（1523年）においては「聖パウロは彼（クプロの総督パウロ・セルギオ）を回心せしめたが、彼をなお異教徒の間であって之を治める総督のままでおらせた。また多くの聖なる殉教者たちも同様な態度をとり、彼らは異教徒たるローマ皇帝に従い、その下で従軍し、平和を守るために疑いもなく人を殺したことは、聖モリス、アカティウス、ゲレオン、そのほかユリアヌス帝麾下の多くの人びとについて記されている通りである」（吉村義夫訳、岩波文庫、1954年、42頁。（ ）内は引用者補足）と書かれている。ここでは通例のユリアヌスにつきものだった「背教者」という言葉は使われていない、つまり彼は「普通の」ローマ皇帝のひとりと考えられているのだ^(註4)。

また宗教内乱期のフランスではジャン・ボダンの『歴史方法論 (*Methodus ad facilem historiarum cognitionem* : 英訳 *Method for the easy knowledge of history*)』（1566年）における言及——「「不信仰」という点では、異教徒であるタキトゥスがキリスト教を攻撃するのは不信仰の現われではなく、逆に自らの信仰に敬虔であることの現われであり、ましてや彼の時代にはキリスト教の方が少数派の誤った宗教とされていたのである。この主張は背教者ユリアヌスの弁護でも繰り返されている。こうした主張はボダンが如何に普遍的な自然宗教の立場にたっていたかをよく示している。…(中略)…モンテーニュはボダンの歴史家選択の批判的基準、それにタキトゥスと背教者ユリアヌスの弁護をほとんどそのまま繰り返すことになる」（清末尊大『ジャン・ボダンと危機の時代のフランス（木鐸社、1990年、117頁）——を契機としてユリアヌス帝は復活し、その後人文主義者（フマニスト）モンテーニュの『エッセー』（1580年）におけるユリアヌス弁護論や啓蒙主義者ヴォルテールによる「ユリアヌス、哲学者、ローマ皇帝 (Julian le philosophe, Empereur romain)」(『哲学辞典』1764年)という評価が生みだされ、モンテスキューも1734年に出版された『ローマ人盛衰原因論』（田中治男・栗田伸

ユリアヌス帝の変貌

子訳、岩波文庫、1989年)において「この君主(ユリアヌス)は、その英知、堅忍不拔、節儉、統率力、勇気、そして一連の英雄的行動によって蛮族を何度も駆逐した。その名が与えた恐怖から、彼の存命中、蛮族の動きは封じられた」(195頁)と書くことになる^(註5)。モンテーニュの『エッセー』第二卷第十九章「信仰の自由について」におけるつぎのような記述は、後世のユリアヌス評価に決定的な影響をあたえた。

本当に、ユリアヌス帝は実に偉大で稀有な人物であった。精神は哲学の思想に濃く色どられ、そして実際に、どの種類の徳においてもきわめていちじるしい模範を残した。純潔という点では(彼の生涯はそれのきわめて明らかな証拠である)、アレクサンドロスやスキピオにも比すべき話が伝えられている。彼は盛りの年頃にもかかわらず、数ある絶世の美人の捕虜の中の誰にもおおうとしなかった。盛りの年頃というわけは、僅か三十一歳でパルティア人に殺されたからである。正義という点では、わざわざ自分で訴訟の両方の言い分を聞いた。出頭した者どもには、好奇心から、どの宗教を奉ずるかをたずねたけれども、キリスト教に対していただいていた敵意のために、いささかも判断の天秤を傾けなかった。自らも、多くのよい法律を作り、前の皇帝たちが徴集した租税の大部分を撤廃した。…(中略)…ユリアヌス帝は確かに嚴格ではあるが、残酷な敵ではなかった。…(中略)…ある日、彼がカルケドンの町の付近を歩いていると、土地の司教マリスが大胆にも「キリストの邪悪な反逆者」と呼ばわったが、彼はただ「去れ、あわれな者よ、おまえの目が見えないことを嘆け」と答えただけだった。…(中略)…彼は、(もう一人の証人エウトロピウスによると)キリスト教徒の敵ではあったが、その手を血に染めることはしなかった。…(中略)…彼の質素については、常に兵士と同じ生活をした。そして平時にも、戦時のきびしさに自分を鍛えるような食事をとった。…(中略)…あらゆる種類の文学に精通していた。…(中略)

…われわれの記憶では、彼ほど多くの危険に立ち向かい、試練に身をさらした人はほとんどいない。…（後略）…

宗教に関しては、あくまでも誤っていて、キリスト教を捨てたために、背教者とあだ名された。だが私には、彼が一度もキリスト教を信じたことがなく、ただ法律に従うために、帝国を手に入れるまで信じた振りをしていて、という説のほうが本当らしく思われる（原二郎訳、ワイド版岩波文庫（四）、130-2頁）

後年アンドレ・ジイドは『モンテーニュ論』（渡邊一夫訳、岩波文庫、1939年、31頁）において、上述のモンテーニュの文章を引用しながら「ユリアヌス皇帝の人物が、かくも彼（モンテーニュ引用者補足）を強く牽き附けた所以のものは、正にこの邊にあるのである。／加特力教のうちで、彼の気に入る、彼が讚美し賞揚するものは、その秩序あることと由緒の深いこととである」と書いている。さらにモンテーニュが後世にあたえた影響の一例として、現代フランスの作家ミシェル・ビュトールによる『エッセーをめぐるエッセー—モンテーニュ論』（松崎芳隆訳、筑摩書房、1973年）に収録された「背教者ユリアヌスの弁護」では、ラ・ボエシーとユリアヌスをくらべながら「モンテーニュは心に哲学的異教主義をはぐくんでおり、これに較べれば熱狂的なキリスト教信仰こそかえって背教だったのかもしれない。…（中略）…まず一五六二年一月十七日のあの勅令が発布されて新教徒に集会の自由が与えられるが、ラ・ボエシーはこれにかんして「覚書」を書いた、次いで一五七二年には聖バルトロメオの大虐殺が起こる、…（中略）…一五七六年と一五七七年には《信仰の自由》をある程度許す新たな措置がとられる、まさにこれらは、モンテーニュの言い切るように、心ひそかにキリスト教の死を希う王侯のとったかもしれぬ措置、まさしくユリアヌス帝のかつてとった措置である」（同書、160-2頁）と書かれている。

ユリアヌス帝の変貌

若きデイドロも「哲学断想」(1746年)において、ユリアヌスが362年8月1日にアンティオキアからだした書簡を引用しながらこう書いている。

政治では、古いものを変えるのはつねに危険なことである。宗教の中でももっとも神聖でおだやかなキリスト教ですら、多少の混乱を起さずにはその地歩を固められなかった。教会の最初の子らは一度ならず温和と忍耐という掟を破った。ここにユリアヌス帝の勅令^マの抜粋を二、三かかげさせてもらいたい。それは、哲人皇帝の人柄と、当時の熱狂的な信者の気質とを、じつにみごとに示している。…(中略)…この人に対しては、異教徒だったことを非難できても、背教者という非難は当たらない。…(中略)…驚くのは、この学識ゆたかな皇帝の著作が今でも残っていることである(「哲学断想」、『デイドロ著作集 第一巻 哲学I』所収、小場瀬卓三・平岡昇監修、法政大学出版局、1976年、13-4頁)。

さらに英国においてはじめてユリアヌスの名を冠する書物が登場するのは名誉革命期においてであった。すなわちサミュエル・ジョンソン(Samuel Johnson, 1649-1703年。ジョンソン博士とは別人)による *Julian the apostate being a short account of his life, the sense of the primitive Christians about his succession and their behaviour towards him : together with a comparison of popery and paganism*. London: Printed for Langley Curtis. MDCLXXXII [1682] においてだった。本書についてはマコーレーが『英国史』(1848年)においてつぎのように記している。

(反ジェームスの)陣営が設立されるや、新教徒兵士と旧教徒兵士との間に反目が発生した。「新教徒全陸軍兵士に対する謙遜篤実な建言」と題する小冊子が流布されて、その作者は兵士に対してその武器を旧教防衛のためではなく、聖書、大憲章、権利訴願の防衛のために使用することを要請した。こ

ユリアヌス帝の変貌

の作者は既に国王から睨まれていた人物で、その性格は注目に値し、その経歴は極めて教訓的なものであった。

その作者はサムエル・ジョンソンと呼ばれる英国教会牧師で、ラスル卿 (Lord Russell) の雇用牧師となっていた。ジョンソンは敵手から徹底的に憎悪されると同時に味方からは愛されるよりも寧ろ尊敬される人物であった。徳性は無垢にして宗教的感情は熱烈、学識や才能も相当なものであったが、思慮分別に乏しく、気質は激烈乱暴にして極度に強情であった。彼が英国教会牧師であったことは特に熱烈な王権党員から憎悪される原因となった。というのは、英国教会牧師で共和主義を主張する者は殆ど例外且つ不自然なことであったからである。前治下にジョンソンは『背教者ユリヌス』と題する書を発表し、四世紀のキリスト教徒が無抵抗の教義を支持していなかったことを論証したのであった。王位継承除外法案に反対した英国国教会牧師の精神と全然相違した精神を以て書かれた文句をクリシストム (Chrysostom) やイエローム (Jerome) から引用することは容易なことであった。しかも、ジョンソンの主張はそれを越して、リバニウス (Libanius) が明白な根拠からユリウスのキリスト教徒兵士に負わした非難を復活せしめんと企画し、背教者を殺害した投槍が敵から来たものではなくて、ラムボルド (Rumbold) やファーグソン (Ferguson) の如きローマ兵士から来たものであることを主張したのであった。激烈な論争が発生し、民権党 (Whig) と王権党 (Tory) の論客は、グレゴリー・ナジアンズ (Gregory of Nazianzus) がある者に笞刑を加えんとした敬虔な司教を称揚した不明確な文句に就いて、激論した。民権党員は司教が皇帝に笞刑を課せんとしたのでであると主張し、王権党員は司教が或る近衛連隊長に笞刑を加えんとしたのでであると断言した。ジョンソンは攻撃者に対して丹念な返答を準備し、その返答の中でユリウスとその当時ヨーク公であったジェームスとの間の類似を指摘した。ユリウスは多年に亘り偶像の嫌

悪を装っていたが、心中は偶像得崇拜者であった。ユリウスは便宜上時々良心の権利を主張したが、真実の宗教を採用していた都市からはその自治権を奪取した。そして、ユリウスは佞人たちから正義者と呼ばれていたのであった。かくして、ジェームスは極度に激昂し、ジョンソンを誹毀罪として告発した。ジョンソンは有罪を決定されて巨額の罰金を課せられたが、それを支払い得なかったので監獄に投じられ、生涯出獄出来ないように見えた(マコーリー『英国史(中巻)―革命の部』中村經一訳、旺世社、1949年、273-5頁。())内は引用者による補足。表記および仮名遣いを変更した。以下同様)。

その後ジョンソンは高等法院裁判所監獄に投獄される。そして上階に投獄されていた稀代の知能犯ヒュー・スピーク(Hugh Speke)によって利用され、「子供のように単純な」ジョンソンはスピークに唆されて「兵士の反抗を扇動する論文」を書きつづける。秘密印刷所の経営者と通じていたスピークは、「ユリウス・ジョンソン」(当時のあだ名)が書いた論文を数千部の小冊子にして兵士たちに散布しようとした。散布役の兵士の裏切りによりジョンソンの犯行が露呈するが、「ジョンソンは自己を救うためにスピークを裏切るような人物ではなく、ジョンソンは告発されて直ちに有罪を判決された」(同上、276頁)。刑罰(三百一七回の笞打)執行以前にジョンソンから聖職剥奪の決定がなされ、高等宗教法院からロンドン教区の職務を委託された監督たちが彼を聖ポール寺院の牧師団室に招致した。その際にジョンソンが語った言葉——「諸君は私が諸君の聖衣を擁護したとの理由で私を聖職から追放するのである」——は、人びとに深い印象をあたえた。それと同時にこの種の事件にたいするジェームス二世とウィリアム三世との対応のちがいは、君主の性格のちがいととも確実な時代の変化を示している。ジェームスいわく、「ジョンソン君は——とジェームスは言った——殉教者となる精神をもっている。だから、殉教者となることは最も適したことなのである」。ウィリアムいわく、「この男(激烈大胆なジェームス党員 Ja-

cobite の一人) は殉教者になることを欲しているが、余はこの男を失望さそうと決意している」(同上、278頁)。ここにジャコバイトにたいして「殉教者」になることさえも認めようとしないウィリアムの老獪さをみるべきなのか、はたまたホイッグ寡頭体制の「抑圧的寛容？」をみるべきなのか？

そしてついに「唯一無二のローマ帝国史家」エドワード・ギボンの『ローマ帝国衰亡史』(1776-88年、以下『衰亡史』と略記)における記述(22-24章)によって、ユリアヌス像が一変することになった。たとえばロイ・ポーターは『衰亡史』に描かれたユリアヌス帝についてこう書いている。

『ローマ帝国衰亡史』のなかで、著者が好意的記述に最大限近づいたのは、皇帝ユリアヌス〔三三一? - 六三、ローマ皇帝〕(キリスト教徒には「背教者」として知られている)を描いたときである。…(ロイ・ポーター『ギボン—歴史を創る』中野好之ほか訳、法政大学出版局、1995年、116頁)。^(註6)

19世紀以降になると、彼を称賛する多くの詩・小説・評論・研究が出版されるようになった。たとえばトマス・ハーディの『日陰者ジュード (Jude the Obscure)』(1894年)においてはアルジャノン・チャールズ・スウィンバーン (Algernon Charles Swinburne)^(註7)のつぎのような一節が引用される。

それはギボンの著作の一巻で、彼女は背教者ユリアヌスの治世を扱った章を読んだ。時々顔を上げて石膏像を見上げたが、二つの像は、たまたま中間にキリスト磔刑の地の版画がかかっていたので、場違いで違和感があった。その光景にそそのかされてこんなことがしてみたくなったかのように、彼女はとうとう跳び起きて、別の本を箱から取り出し

——詩集だが——お馴染みの詩——

ユリアヌス帝の変貌

汝は勝利を得たり、青白きガリラヤ人よ、
汝の息吹を受けて、世界は灰色に変わりぬ！

(Thou hast conquered, O pale Galilean:

The world has grown grey from thy breath;

From 「プロセルピナ讃歌 (Hymn to Proserpine)」)

を開くと、それを最後まで読んだ。やがて、蠟燭を消し、服を脱ぎ、最後に枕許の明かりを消した（『日陰者ジュード』川本静子訳、国書刊行会、1988年、91-2頁）。

そして1903年にはクレメント・パーソンズ女史 (Mrs. Clement Parsons) の通俗小説 *Sir Julian the Apostate* (London: William Heinemann, 1903) が出版されるほどに、ユリアヌスの名前はポピュラー化されるにいたる。

それに反して、かつてローマ帝国期においては「蛮族」として描かれたドイツ(ゲルマニア)では、「蛮族」と呼ばれた恨みからか——じじつヴォルテールはフリードリッヒとの親交と宮廷での厚遇にもかかわらず、1753年にフランクフルトにおいて自分にたいしてなされたプロイセン国王フリードリッヒ二世の配下による拘禁を、「野蛮な東ゴート人やヴァンダル人たちの所業」といったと伝えられている。ハンス＝ヨハム・シュートリヒ『ヴォルテール、ただいま参上!』松永美穂訳、新潮社、2015年を参照) 古代ローマの文化・歴史・思想についてのギボンに匹敵する叙述は、テオドール・モムゼンの大著『ローマの歴史』(原著は第一巻1954年、第二巻1855年、第三巻1856年、第五巻1885年にそれぞれ出版されたが、第四巻は出版されなかった。ただし叙述範囲はローマの成立からカエサルまで。邦訳(全四巻)長谷川博隆訳、名古屋大学出版会、2005-7年)の登場まで待たなければならなかった。ダウイド・フリードリッヒ・シュトラウスの大著『イエスの生涯(全2巻)』(岩波哲男訳、教文館、1997年、原著出版:1835年)では数か所ユリアヌスの名前が言及されは

するが、ユリアヌスについてのかなり長めの叙述がはじめて現われるのは、ヤーク・ブルクハルトの名著『コンスタンティヌス大帝の時代—衰微する古典古代からキリスト教中世へ』（原著出版、1853年）においてだった。しかもその描写は悪意にみちたものだった。

救いようのない頑固と野心により、このうえなくばかげた弁証法によりずたずたにされた（キリスト）教会のかたわらで、少年ユリアヌスは当時成長したのであった。コンスタンティウス二世帝が自分の家族全体に仕掛けた殺戮をからかろうじて生き延びて。彼の異母兄ガルス（副帝。在位三五一一—三五四）は辺鄙なカッパドキアにあるマケロン（マケドニア）の離宮で聖職者になるべく育てられた。彼らの慰みは、聖なる殉教者ママスの礼拝堂を建造することであった。こうした出来事の印象を受けながら未来の異教的反動主義者は育成されたのである」（『コンスタンティヌス大帝の時代—衰微する古典世界からキリスト教中世へ』新井靖一訳、筑摩書房、2003年、441頁、傍点は引用者）。

そしてユリアヌスの名を冠するドイツ語の最初の書物はおそらく、前述したシュトラウスによる *Der Romantiker auf dem Throne der Cäsaren, oder Julian der Abtrinnige. Ein vortrag*, (1847) だった。シュトラウスのイエス論は同時代の青年ヘーゲル派に多大の影響をあたえ、のちにレーニンによって「背教者」と名指されるカール・カウツキーが『キリスト教の起源』（栗原佑訳、法政大学出版局、1974年、原著出版：1908年）を執筆するうえで参照されることになるが、本書の第三章「ローマ帝政時代の思考と感情」にはユリアヌスはまったく登場しない。

以上は20世紀初頭までのユリアヌス帝の変貌の素描だが、本稿ではそのような変貌がどのような時代の変化のなかで生じたのか、また20世紀に入り陸続として現われるユリアヌス関連文献をフォローしながら、その変貌の様相を政治思想史的観点からたどる。その際に筆者が目にするのは辻氏の小説にみら

れる、以下のような考え方の政治思想的含意——とりわけこの作品に類出する「秩序」という考え方である。

ユリアヌスはつぎのような考えを書記に口述筆記させ、それが仕上がると、秩序論と題して師リバニウスに送った。

「秩序があつてはじめて各人が真実に自由でありうる。なぜならローマの秩序は人間を真に人間たらしめる城塞のごときものだからだ。だが、秩序が人々にとって圧迫となるとき、もはや秩序は真の秩序とは言い得ない。したがって秩序は人々の同意と自由意志による服従を前提とする。地上の秩序は、たえずよりよい秩序への歩みと、同時に、刻々の秩序への服従とを含まねばならぬ」(辻邦生『背教者ユリアヌス』中公文庫版(中)、358頁。傍点は引用者。以下同様)。

ユリアヌスはガリアへの進軍の途上、シルミウスで親友ゾナスと軽業師ディアに再会し彼女にこう語りかける。

「ディア、君が軽業を私に捧げてくれるように、私は秩序と正義をこの帝国に捧げようとしているのだ。ローマは広大で、永遠な存在だ。しかしそのようなローマでさえ、いきなりローマ帝国があるのではない。そこにはガリアの民もおり、ダキアの民もあり、シリアの住民たちもいる。そしてそのガリア一つ、ダキア一つとってみても、また無数の人々がいるのだ。ディア、君は町から町へ興業してまわって、こういうことを肌で実感しているのではないかね。そうなのだ、ディア、ローマとは、どこか別にある大きな一つの顔ではなく、この無数の個々の人間のなかに現われてくる現実の姿にはかならない。私がローマ帝国に秩序を捧げようというとき、それは、こうした民の一人一人の生活に結びつくことを意味するのだ」(同上(下)、167-8頁)。

またキリスト教の「暗い顔の」司祭アブロンには、こう語りかける。

「もちろん私はローマが病んでいることを知っている。貧民たちが苦しんでいることを見てきた。被征服民がローマ人の鞭で打ちのめされたという話も聞いている。だが、そうだからといって、私は、内心の自由、平等を人々にすすめるより前に、真にローマ帝国の意図を実現することによって、そうした不正や、不信や、不平等をなくすべきだと考えている。私は秩序の体現者だ。私は、あなたのようにただ万民は神の前で平等であると言えないのだ。秩序は上下の位階を含み、ある目的への意志によって統御されている。だが、その秩序は、そこに含まれるすべての人が、それぞれに応じて幸福であるがゆえに、秩序としての意味をもつのだ。もし秩序がかかる全体への配慮を失えば、そのとき秩序は枯死する。だから秩序は、ただ全体の福利を含みうるときにのみ、無秩序に対して戦いうる。もし私があなたの万民平等を無秩序と呼べば、あなたは不本意であろうと思う。だが、それはやはり無秩序と呼ばなければならない。私はどんなことがあっても、秩序の側に立ち、それを枯死から守らなければならないのだ。…(中略)…だが、ユリアヌスはアブロンのように、絶対の正義のためにの秩序や平和を乱す気にはならなかった」(同上(中)、356-7頁および(下)、260頁)。

さらにユリアヌスの側近のひとりであり、アリストテレスの注釈者でコンスタンティノーブルの元老院議員でもあった哲学者テミスティウス^(註8)は、ペルシア遠征を前にして自分が不在になることを憂慮する腹心アリピウスに向けてこう語る。

「問題の核心はただ一つ、キリスト教をいかにしてローマの秩序に服させるべきか——つまり熱狂的な絶対探究者たちに対して、いかにして地上の相対

的な調和感覚の意味を納得させるか、ということです。おそらく人間の歴史はこの二つの生き方、考え方のあいだで揺れ動くことでしょう。一方は厳しく、他方は柔軟です。一方は渴いたような眼をし、他方は距離を置いた眼をしています。しかし人間が人間でありつづけるためには、人間を殺すような絶対を拒むほかありません。これはローマの限界ですが、同時に人間の限界でもあるのです。しかし人間の品位はただこの限界を知って、そこで踏みとどまり、その宿命を背負うことにしか生まれません。アエリアの神殿再建もその一つの現われです。アリビウス、私はあなたの悩みはわかるが、苦悩によってしか人間は偉大にならぬのも事実です」(同上(下)、334-5頁)。

もとより「ゾナス」と「ディア」は架空の人物であり、引用部分におけるユリアヌスの言葉やテミスティウスの言葉もまた作者によるフィクションであろう。だが辻氏は本書執筆のために国内外の膨大な文献を渉漁し、またユリアヌス自身の手になる著作を読みふけたと思われる。現に篠田一士は「事実、作者は、哲学者であり、また、そうあることをたえず願っていたと思われるユリアヌス自身の数多くの著作をはじめ、彼の同時代の歴史家の記述はもちろんのこととして、以来、この哲人皇帝について、うずたかく書きつづられてきた歴史的文献を調べ、たとえば、ビデスの『皇帝ジュリアンの生涯』(J. Bidez: Vie de l'empereur, Julien.)といった高度な専門書まで読んだとおぼしき形跡がある」(同上(下)、「解説」, 435頁)と書いている。

さいわいなことにユリアヌスについては歴代ローマ皇帝のなかでも稀にみるほど数多くの彼自身の著作(*The Works of the Emperor Julian*, 3 vols. Loeb Classics Library)が残されおり、直接ユリアヌスに言及していないにせよ彼の著作を理解するうえで重要な同時代の記録の邦訳——たとえばユリアヌスの盟友リパニオスの『書簡集1』(西洋古典叢書, 京都大学学術出版会)やアエリウス・スパルティ

アヌス『ローマ皇帝群像(全4巻)』(西洋古典叢書)さらにはエウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』(西洋古典叢書), 同『教会史(上・下)』(講談社学術文庫)——や関連文献——カッパドキアのアリウス派の司教ナジアンゾスのグレゴリオス(Gregorius of Nazianzos)による『ユリアヌス駁論(*Invectives Against Julian*)』やアンミアヌス・アルケリウス(Ammianus Marcellinus)の『歴史(*Res Gestae*, 英訳版 *The Roman History of Ammianus Marcellinus*)』, サルデイスのエウナピオス(Eunapios of Sardis)の『哲学者・ソフィスト列伝』(西洋古典叢書), アレクサンドリアの司教キュリロス(Cyril of Alexandria)の『ユリアヌス駁論(*Against Julian*)』(キュリロスは, 後述するヒュパティアが殺害されたときにアレクサンドリアの司教だった)——などが残されている。ナジアンゾスのグレゴリオスの著作は『盛期ギリシア教父(中世思想原典集成)』(上智大学中世思想研究所編訳・監修, 平凡社, 1992年)に訳出されている。

近年の研究書や小説・評伝としてはG・W・パワーソック『背教者ユリアヌス』(新田一郎訳, 思索社, 1986年。原著: G. W. Bowersock, *Julian The Apostate*, (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1978.) やD・S・メレシコーフスキー『背教者ユリアヌス—神々の死』(米川正夫訳, 米川哲夫・米川良夫改訂, 河出書房新社, 1986年, ロシア語版の全訳。原著出版, 1898年。英訳版: *Julian The Apostate*, translated by Charles Johnston, (Philadelphia: Henry Altemus, 1899.)を代表とする, ユリアヌス関連文献の翻訳も数多く存在する。とくに後者は旧制高校の教養文化のなかで育った学生の愛読書だったという(中西恭子「日本における『背教者』ユリアヌスの受容に関する考察」, 『宗教研究』84巻4号, 2011年を参照)。またノルウェーの劇作家イブセンが1873年に刊行した, 「第一部 カエサル(副帝)の背教」および「第二部 皇帝ユリアヌス」から成る二部構成の大作『皇帝とガラリア人』も翻訳・出版されている(『原典によるイブセン戯曲全集〈第3巻〉』原千代海訳, 未来社, 1989年, 所収。本書については大類伸「皇帝とガラヤ人」『世界思潮三講』(育生社, 1948年)所収を参照。この論説は, 元来は『岩波講座世界思潮』(岩

波書店、1928年)に発表されたものの再録である。大類は『皇帝とガリラヤ人』は「真の史劇」であり、「メレジュコフスキーのユリアヌスを主題とした歴史小説『神々の死』は、歴史哲学なイプセンの作に比すれば単なる記述的歴史にすぎない観がある」と述べている。この論の当否については次号以降で論ずる。

なおイプセンの邦訳としては以下の三点がある

(1)「カイザルとガリラヤ人」中島孤醉訳、『新評論』1914(大正3)年、11月号；(2)『皇帝とガリラヤ人』、島村民蔵訳、世界名著叢書5、東京堂、1923(大正12)年(近代デジタルライブラリーより入手可能。訳者あとがきには「訳文は独文イプセン全集の本文を主として、レクラム版の独訳と、アアチャーの英訳を参照した」とある)；(3)「皇帝とガリラヤ人 第一部第一幕」、小山内薫訳、春陽堂、1929(昭和4年)。小山内訳はドイツ語全集版からの重訳で『小山内薫全集4』臨川書店、1975年に収録されている。水木京太の「解題」によれば小山内は「その口譯を鈴木春浦氏に筆記せしめ、二部十幕の全部を譯了されてゐる。そして厳密な校訂を施した上で公にする豫定で改めて補修の筆を執られたが、漸く第一部第二幕に及んだまま永久の未定稿となった。『世界戯曲全集』に豫告されながら収載されなかった所以である」とある)。

さらにはわが国でも折口信夫が随筆「壽詞をたてまつる心々」においておそらくは島村蓼二訳に言及しながら「故人岩野泡鳴が『悲痛の哲理』(本書の出版は1920(大正9)年——引用者補足)を書いたと前後して、『背教者じゅりあの—神々の死』が、初めて翻訳せられた。此の二つの書き物の私に与えた感激は、人に伝えることが出来ないほどである。民族主義・日本主義は凜として来た。／＼じゅりあん皇帝の一生を竟へて尚あとを引く悲劇精神は、単なる詩ではなかつた。古典になじんでも、古代人の哀しみに行き触れない限りは、其は享樂の徒に過ぎない。…(中略)…私一己にとっては、じゅりあん皇帝を扱つたためれじゅこふすきい氏の文学は、文学と言ふよりは、生活と感ぜられた。精神として感ぜられた。つまり史学よりも、もっと具体的な史学として、我が大和・寧樂に対する比較研究の情熱を促したのであつた」(『日本評論』第13巻第6号、1938(昭

和13)年5月に掲載。『折口信夫全集 17』中央公論社, 1996年, 424-5頁)と述べている。

上述のように中西恭子氏はメレシコーフスキイの翻訳が「旧制高校の教養文化」のなかでひろく読まれたと指摘している。その意味では辻氏の小説が1960年代末から70年代にかけて大学生だけではなく、ひろく読者に受け容れられる素地は整っていたといえよう。ただし辻氏自身の回想によれば氏の旧制松本高校時代には友人たちが『神々の死』を好んで読んだとは書かれているが、氏自身が読んだのは『神々の復活』だけであるとのことである(辻邦夫「歴史小説論」、『歴史小説集成第十二巻』岩波書店, 1993年所収, 158頁)。

しかしながらわが国の学界における本格的なユリアヌス研究はけっして豊かとはいえない。わずかに秀村欣二氏, 中西恭子氏, 長友栄三郎氏, 南川高志氏, 南雲泰輔氏らによる一連の優れた研究があるだけである。いわんや政治思想の領域でユリアヌスを扱った研究は、管見に属するかぎり、坂井礼文氏の論文「コジェーヴ-シュトラウス論争において『ユリアヌス帝とその著述技法』が持つ意義: 著述技法及び無神論をめぐって」(『人間・環境学』22-, 1-18, 2013年)だけである。

本稿ではそれらの先行研究を参照にしながら、(1)西洋文化のなかでローマ皇帝ユリアヌス像がどのように変貌してきたかの経緯をたどるとともに、(2)彼の著作や同時代の歴史家、後世の研究者、作家、評論家など多くの人びとによって「語られた」かぎりでのユリアヌス帝の姿を探究しようとするものである。もとより筆者は西洋古典学の専門家ではなく、西洋古代政治史の専門家でもない。ただかつて辻氏の小説を読みふけり、それをとおしてユリアヌス帝の生涯に共感したことのある一介の西洋政治思想史の研究者にすぎない。ベン・ジョンソンがシェイクスピアについてのべたように「Small Latin and Less Greek」どころか、No Latin, No Greek and No Frenchであり西洋古典学の学術的訓練を受けたことはない。そのようなわたしがこのような課題に取り組む

ことの無謀さは、十分に承知している。したがって史料選択上の不適切や引用文献の不正確さ、歴史上の事実についての誤認などの点で多くの遺漏があるだろう。ご指摘いただければ幸いである。

ただし門外漢の「声」にもそれなりの効用はあるだろう。オークショットがいうように「(「会話」としての知的探求の場には)饗宴の主宰者あるいは裁定者といった人物は存在しない。参加資格を審査する門衛すら見あたらない。いかなる参加者も額面通りに信用されるし、思索の流れに身をゆだねることができるものは何でも入場を許可される。…(中略)…会話はぶっつけ本番の知的冒険である。会話とギャンブルには相通ずるものがある。いずれの場合にもその意義は勝敗の結果にあるのではなく、賭けることそのもののなかにある」(拙訳「人類の会話における詩の声」、マイケル・オークショット『保守的であること—政治的合理主義批判』、昭和堂、1988年、214頁)からだ。本稿がユリアヌス帝をめぐる「会話」にいくばくかの知的刺激をあたえることができれば幸いである。

(1) 二〇世紀ギリシアへの旅

先述したようにユリアヌス帝が人口に膾炙するようになったのはギボン『衰亡史』以降のことである。ギボンが『衰亡史』を執筆しようと思いついたのは「一七六四年十月十五日の夕暮れ時に、私がゾコランティつまりフランシスコ修道士の教会に坐して黙想していた折しも、彼らがカピトリノの廢墟のユピテル神殿で晚禱を誦する声を聞いた時であった」(『ギボン自伝』中野好之訳、筑摩書房、1994年、144頁)。その後の歴史学においてはローマ帝国後期、帝政後期、あるいは「古代末期 (late antiquity)」(ピーター・ブラウン) についての見方自体が変貌しつつけている。この時代を表現するために用いられる語彙も「衰退」「頹廢」「崩壊」などなどから「多様性」「豊かさ」「共存」(ピーター・ブラウン) などへと変化し、最近ではふたたび「暴力」「経済的破綻」「収税の基盤の喪失=軍事力の弱体化」(ブライアン・ワード=パーキンズ) などが強調されるよう

になった。

英国の政治哲学者マイケル・オークショットによれば「歴史」とは、現在にまで生き残った文書、遺跡、遺物などの残存物、つまりは事跡 (res gestae= things done) から (あくまでの現在の時点で) 構成される過去についての言明にはかならない (『歴史について、およびその他のエッセイ』添谷・中金訳, 風行社, 2013年を参照)。それはあたかもジグソーパズルのようなもので、最後のピースが見つければパズルは完成されると思った瞬間に、まったく形状が異なるピースが発見されると、そのピースがうまくはまるような、それまでとはまったく異なる構図を構想しながらもう一度最初からやり直さなければならないのだ。ユリアヌス帝が生きた時代についての歴史も、また (そういうものがあるとして) 歴史的事実としてのユリアヌス帝個人についても同じことだ。それまで存在しないとされていた史料が発見されれば、その史料と整合するように、それまでの歴史=物語が再構成されなければならない。

わたしはそういう意味での「歴史=物語」には関心がない。つまり本稿でわたしは (オークショットの意味での) 歴史家ではない。わたしが関心をもつのはあくまでも「語られた」かぎりでのユリアヌスであり、その「語られた」ユリアヌスを読んだ読者のことである。つまりなぜある人物がある時点でユリアヌスについてどのようなことを語ったのか、そのことがどのようにして別の人物が別の時点でユリアヌスについて語るように仕向けることになったのか…云々というもつれた糸をときほぐすことによって、西洋文化に伏在する地下水脈のようなものが浮かび上がってくるのではないだろうか。わたしが本稿で意図するのはいわば、わたしなりのユリアヌスへの旅行記、「ユリアヌスをめぐる冒険」なのだ。

それにしてもなぜかくも数多くの人びとがユリアヌスについて語るのであろうか。ユリアヌスというアイコンはなぜかくも多くの人びとを語りへといざなうのであろうか。もちろんキリスト教と異教、一神教 (The God) と多神教 (The

Gods), 狂信と理性, 寛容と非寛容, 正義と秩序 (生存), 自由と安全, 文明と野蛮という西洋文明の根本にある問題のしからしむるところではあろう。だが今やポップカルチャーにまで浸透・蔓延している^(注9)ユリアヌスというアイコンの在り様は尋常ではない。

カヴァフィス, フォースター, ヴィダル (ヴィダールと表記されることもある), 折口信夫など性的指向を共有するとおぼしき人たちが, 同じく髭をはやした皇帝ハドリアヌスという強力なライヴァルがいるにもかかわらずなぜユリアヌスを好むのだろうか? また英国, フランスにくらべてアメリカやドイツでのユリアヌスへの言及が少ないのはなぜなのか? 管見に属するかぎりアメリカ人による Book-length のユリアヌス関連本は, 民主党の下院議員を務めたこともある Charles Jared Ingersoll, *Julian: A Tragedy in Five Acts*. (Philadelphia: Carey & Lea. 1831.), ニューイングランドで育った女流作家 Eliza Buckminster Lee, *Parthenia: Or The Last Days of Paganism*. (Boston: Ticknor and Fields, 1857.), そして 20 世紀後半におけるサブカルチャーをもふくめて, ユリアヌスへの関心の高まりに決定的な影響を与えたゴア・ヴィダルによる著作の三点だけである^(注10)。

またユリアヌスの同時代人プルデンティウスによるユリアヌス評価がアイロニーに満ちていたように, 1500 年あまりの時代をへだてた現代ギリシアの詩人カヴァフィスによるユリアヌス詩編が, プルデンティウスと相似形のようにアイロニカルなのはなぜなのか? 『その男ゾルバ』の作者ニコス・カザンザキスにとってユリアヌスとはいったい何者だったのか? ユリアヌスへの旅は 20 世紀ギリシアから始まらなければならない。

海外における数あるユリアヌス帝にかんする研究書のなかで, わが国で翻訳・出版されているのは G・W・パワーソック『背教者ユリアヌス』(新田一郎訳, 思索社, 1986 年。原著: G. W. Bowersock, *Julian The Apostate*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1978.) だけである。本書のエピグラフにはギボン

と現代ギリシアを代表する詩人コンスタンディノ・カヴァフィス (Κωνσταντίνος Π. Καραγάθης, 1863-1933年) からの引用が掲げられている。パワーソックの意図はギボンを「ユリアヌス鼯鼠派」、カヴァフィスを「ユリアヌス嫌悪派」の代表に擬することにあると思われる。カヴァフィスからの引用はユリアヌスの著作『ひげざらい (ミソポゴン)』にまつわるものである^(註11)。ユリアヌスはこの著作をペルシア遠征の直前にアンティオキアで執筆した。アンティオキアは彼にとって因縁の地であった。ダフネの森のアポロ神殿の炎上、穀物不足による人心の動揺と娯楽の禁止にたいする一般市民の反感と離反に直面したり、さらにはイェルサレムのユダヤ寺院再建計画を練ったりしたのもこの地においてだった^(註12)。ローマ帝国東方の重要都市アンティオキアでは、若き日々には彼が親しんだギリシア語が日常語として使われていた。『ひげざらい』もギリシア語で書かれている。彼の事績をわたしたちができるもの、この市出身のアンミアヌス・マルケリヌス『歴史 (Ammiani Marcellini Rerum Gestarum Libri Qui Supersunt)』によってである。同市は現在シリアとの国境にほど近いトルコ領のアンタキアという名前で呼ばれているが、かつての繁栄の面影はない。

中世「ローマ人」のビザンツ帝国の一部をなした地域が今日の主権国家ギリシアとして、バルカン半島におけるロシア、トルコ、フランス、英国の権益をめぐる戦いのなかで翻弄されながらも、オスマン・トルコ帝国による支配から独立したのは1830年のことである。当初は君主制だったがその後共和国になってからも、ナチス・ドイツによる侵略、冷戦の余波による内戦の頻発によって、その独立はたえず脅かされてきた。そうしたなかで独立国家ギリシアの存続に貢献した人物としてニコス・カザンザキス (Νίκος Καζαντζάκης, 1883-1957年、カザンツァキと表記される場合もある) がいる。彼がナチス占領下で執筆した『その男ゾルバ』(原著出版1943年、邦訳、秋山健訳、恒文社、1967年)の主人公は、戦後になって独立国家ギリシアを象徴する人物として国民的英雄

となる。また彼は斬新なイエス・キリスト像を描いて物議をかもす——マーティン・スコセッシ監督作品『最後の誘惑 (The Last Temptation)』はいったん制作中止なり88年に映画化されたが、カトリック教会系団体の反発をまねいた——とともにユリアヌスにも関心をもつ人物である。まずはカヴァフィスとカザンザキスというふたりのギリシア人のユリアヌス像を検討しよう。

さいわいなことにカヴァフィスについては全作品の優れた翻訳と評伝の翻訳があり^(注13)、カザンザキスについてもほとんどの作品が翻訳・出版されている。わたしにとって興味のある戯曲『背教者ユリアヌス』にかんしては、キプロス生まれの現代ギリシア人による優れた考察 (George Syrimis, "Empire, Religious Fanaticism, and Everyman's Dilemma: Julian the Apostate in Kazantzakis and Cavafy", in: *Journal of Modern Greek Studies, Supplement to Volume 28, Number 1, May 2010, pp. 79-103*) がある。この論文を手がかりにしながら現代ギリシア人にとってユリアヌスとはいったい何者なのか、いったい論者 (シリミス) はユリアヌスをもちいてなにを語ろうとしているのであろうか、それを以下において検討しよう。

カヴァフィスの作品には「ユリアヌス詩編 (The Julian poems)」と呼ばれる六篇の詩——「ユリアヌス 侮蔑をみぬいて…」(1923年)「ニコメディアのユリアヌス」(1924年)「僧侶・信徒の大行列」(1926年)「ユリアヌスとアンチオキオびと」(1926年)「ユリアヌスと神秘」(1896年、未刊詩篇より)「アンチオキオの郊外にて」(1932-3年、未刊詩篇より)——がある。前述したパワーソックがエピグラフとして引用しているのは「ユリアヌスとアンチオキオびと」である。この詩はユリアヌスの風刺的著作『ひげざらい』に応答して書かれたものである。カヴァフィスはまずユリアヌスの『ひげざらい』の一節を引用しながら自作を展開する。

彼等は言った、「キ」の字も「コ」の字もわが市の害に
ならぬと。…われらは古い師を呼んだ。…その曰く、

ユリアヌス帝の変貌

「キ」と「コ」は名前の頭文字。「キ」はキリスト、「コ」
はコンスタンティウス。そうだった。

ユリアヌス『ミソコボン』（髭を憎む者）

そもそもがだ、みんなだ、一体全体どうしてあの美的生活をだ、
捨てられるってのか。あの快樂の日々のひろがりのすべてを。
さんざめく芝居小屋。あのががやき。
しなやかな肉のエロスと芸術がひとつに溶ける劇場！

ある点までは不道德。——いや「ある点まで」だって！——
誰でもああだったろ。だが皆の生活、アンチオキアのおぞましい生活は
決して味気なくなんかない。最高の趣向だと皆満足してたじゃないか。

あれ全部をあきらめるのは、一体全体、なんのせいだろうね。

あいつのいつわりの神々への熱っぼいうわごとだ。
あいつのうんざりする自己宣伝だ。
あいつの子どもっぼい舞台恐怖だ。
あいつのこれっぼちも優雅さのない気どりだ。こっけいな髭だ。

だからさ、みんな揃って「キ」を選んだ。
揃って「コ」を選んだ。ああ百度でも選んださ。

『カヴァフィス全詩集（第二版）』（中井久夫訳、みすず書房、1991年、243-4頁）

わたしは中井訳でこの詩を読むまで、パワーソックがギボンと対比しながら

カヴァフィスを引用した意図がわからなかった。というよりもそもそも翻訳版ではカヴァフィスの詩の意味がまったく理解できなかったのだ。念のために対比されているギボンの訳文（中野好夫訳）を以下に掲げる。

だが、とにかくユリアヌスの心は、こうしたエペソスおよびエレウシアの洞窟内において、心からなる不動の神憑りの法悦を体験したのだった。もっとも、彼もときとしては、良心的とも思える狂信者たちの中にすら見られた、いや、少なくとも疑われた一種の信仰的な詐術あるいは偽善と思えるものに気づき、幾度かの動揺を示したこともある（『ローマ帝国衰亡史（3）』ちくま学芸文庫、458-9頁）。

つまり、生涯の最重要事ともいべき問題に関し一大過誤を犯している不幸なキリスト教徒を彼は憐れむかのごとき態度を装って見せたが、やがてその憐憫は蔑視となり、そのまた蔑視は次いで憎悪により深刻化された。しかもそうした彼の見解も、ひとたびそれが君主の口から出るとなれば、いやでもそのつと深い致命傷を与えずにはおかぬ烈しい諷刺的機知の形を採ることになる（同上、489頁）。

以上、著者はユリアヌス帝が迫害者との罪名や非難を避けながら、結果はその実だけを挙げるべく採用してきた巧妙な手口を、できるだけ忠実に述べてきたつもりである。だが、かりにもし狂信という恐るべき情熱が、この有徳の君主ユリアヌスの心情や思想までもゆがめたとするならば、それは同時にキリスト教徒たちの受難の真相（the real sufferings）なるものもまた、同様に人間的情念や宗教的狂信により著しく煽られ、増幅されていた事実をも、公平に認めなければなるまい（同上、511-2頁。なおパワーソックの引用文では原文のイタリック体が無視されている）。

パワーソックの翻訳書の末尾の「索引」には、ユリアヌスの同時代人のなかで「Ⅰ. ユリアヌスに好意的な人物群」と「Ⅱ. ユリアヌスに批判的な人物群」のリストが掲げられている。原書ではそのようなグルーピングはなされておらず、翻訳書では原書の人名・地名等も大幅に削減されている。それにもかかわらず翻訳者によるこのグルーピングは、先述した「ユリアヌス最良派」と「ユリアヌス嫌悪派」というわたしの考えに即応するものだった。ユリアヌスという人物像には憎悪であれ好意であれ、あるいはその双方が入り混じったものであれ、なんらかの感情を読者に喚起させないではおかない魅力がある、つまりユリアヌスは読者にたいして感情的にニュートラルな態度を許さないのだ。政治家・軍人としてのユリアヌスにたいしては徹底的に批判的な塩野七生でさえ「宗教が現世をも支配することに反対の声を上げたユリアヌスは、古代ではおそらく唯一人、一神教のもたらす弊害に気づいていた人ではなかったか、と思う…（中略）…この意味では、ユリアヌスに投げつけられる、今日でもその通称でつづいている「背教者」という蔑称は、実に深い意味のこもった通称とさえ思えてくる。もしかしたら、三十一歳で死んだこの反逆者に与えられた、最も輝かしい贈り名であるのかもしれない」と書いている（『キリスト教の勝利ローマ人の物語XV I』（新潮社、2005年、224頁）。最高の賛辞というべきであろう。

ところでわが国で翻訳・出版されている唯一のユリアヌス研究書であるパワーソックの著書をわたしが読んで驚いたのは、名著『ヨーロッパの知的伝統—レオナルドからヘーゲルへ』（三田博雄訳、みすず書房、1969年）の共著者のひとりであるブルース・マズリッシュの著書（*The Revolutionary Ascetic: Evolution of a Political Type*, New York: Transaction Pub., Revised Edition, 2014）に依拠しながら、ユリアヌスを「孤立的で自己否定的なレーニンや、毛沢東のような活動家を含む禁欲的革命家のグループのなかにはいる資格を無理なくもっている」（邦訳、40頁）という啞然とする断言であった。1930年代にはユリアヌスを「ファシスト

の祖形（プロト・ファシスト）」とする著書も出版されている（F.A. Ridley, *Julian The Apostate and The Rise of Christianity: A Study in Cultural History*, London: Watts & Co., 1937）が、この指摘はできるかぎり歴史的史料に則してユリアヌスの「実像」を描こうとするパワーソックの意図を裏切っているのではないか。つまりは「時代錯誤（アナクロニズム）」という点ではリドリーの著作と同断なのだ。考えてみればプラトンを全体主義の祖とするカール・ポパーの『開かれた社会とその敵』もずいぶんと時代錯誤的だった。ともあれ安易な心理学的タームで理解されたユリアヌスの「人となり（パーソナリティ）」から、彼の宗教政策や統治政策全般を説明するパワーソックの手法にも違和感だけが残った。

奇しくも 1970 年代以降続々と出版されるユリアヌス帝にかんする学術的研究の嚆矢をなすロバート・ブラウニングの『ユリアヌス帝』（Robert Browning, *The Emperor Julian*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1976. 本書については秀村欣二氏による優れた書評がある。『西洋古典学研究』（28）、1980 年を参照）は、パワーソックの著作の二年前に出版されている。パワーソックがあえて書名として「背教者（The Apostate）」を選んだのには、ブラウニングの研究との差別化を図ろうとする対抗意識があったのではないだろうか？ともあれパワーソックは「文献目録」ではブラウニングの著書を挙げてはいるが、本文ではどこにも同書への言及はない。ところがブラウニングは「まえがき」において、近時のユリアヌス研究における三つのアプローチを区別している。すなわち（一）精神分析的手法を彼に適用して、その青年期のトラウマのなかに、彼の際立った「人となり（パーソナリティ）」と振る舞いの説明をもとめるもの、（二）まったく現実的重要性をもたない間抜けな狂信主義者とみなすもの、（三）ユリアヌスは尋常ならざる能力の持ち主であり、彼のなかでその時代と階級の鋭い対立・矛盾のすべてが体现されているとみなすもの、以上の三つである。そしてブラウニング自身は（三）に与すると明言している（*op. cit.*, p. xi.）。まっとうな見解というべきであろう。

ユリアヌス帝の変貌

本筋にもどろう。ブラウニングの分類によれば、パワーソックが引用しているカヴァフィスの詩は(二)のような見方の代表例とみなすことができる。そしてギボン(三)の代表例とみなすことができる。しかしはたしてそうなのだろうか？ わたしは当初「ユリアヌスとアンチオキオびと」という詩は、ユリアヌスが行なった宗教寛容政策の一環としてのダフネの森のアポロ神殿の再建、それにとまなうキリスト教の殉教者バビュラスの遺骨の移送、財政再建の一環としての奢侈・娯楽の禁止に反発したアンティオキア住民、とくにキリスト教徒の不満をカヴァフィスが代弁しているものだと思っていた。たしかに『ひげざらい』には一連の改革の趣旨を理解せずに、いたずらにユリアヌスを誹謗、中傷、揶揄するアンティオキア市民の「忘恩」にたいする苦々しい思いが渦巻いてはいる。だがよくよく読み返してみるとカヴァフィスが代弁しようとしているのは、アンティオキオという都市生活のあり方そのものなのだ。

たとえば彼にはアンティオキアを賛美する「古代このかたギリシアだ」というこのうえなく美しい詩がある。

アンチオキアの誇り　　かがやく建築群、
美しい街路、郊外の　　驚異の田園、
あふれる人口、　　また栄誉満^みてる王ら、
芸術家、賢者、慎重かつ大胆な豪商もまた誇り。
だが、それよりもなお　　はるかに強い誇りは
アンチオキアが　　古代このかたギリシアの都市だ、
イオをつうじて　　アルゴスにつながり、
アルゴスの植民者が、イオコス^{イオ}の娘
イオを讃えて　　辿^{まち}った市だということ。

(前掲邦訳, 251 頁)

ユリアヌス帝の変貌

アンティオキア住民のなかにはキリスト教徒もいれば都市生活を享受する異教徒もユダヤ教徒もいたであろう。ちなみに「東方の女王」（ギボン）あるいは「オリエントの麗しい冠」（アンミアヌス・マルセリヌスの言葉。G・ダウニー『地中海都市の興亡—アンティオキア千年の歴史』小川英雄訳、新潮選書、1986年、188頁参照）と呼ばれた同市にはテオドシウス帝の時代には約一〇万人のキリスト教信徒がおり、そのうち三千人が公共的寄進から生活費を得ていたという（『衰亡史2』第一五章、347頁）。彼らが反発したのはユリアヌスの反キリスト教的措置だけではなく、彼の田舎じみた、愚直な厳格主義（リゴリズム）だったのだ。そしてその厳格主義はユリアヌスの死後、アレクサンドリアで類いまれな美貌の女性哲学者ヒュパティアを矚り殺しにして、古代ギリシア・ローマの貴重な遺産を灰燼に帰せしめた「黒い法衣の男たち」（狂信的な修道士）にも通ずるものであった。カヴァフィスの友人だったフォースターもヒュパティアの死についてこう書いている。

彼女自身はけっして偉人ではないけれど、しかし彼女とともに、ギリシア精神は死んだ。ひたすら真実の発見と美の創造につとめ、アレクサンドリアを建設したギリシア精神は、このとき死んだのである」（E・M・フォースター『アレクサンドリア』（中野康司訳、ちくま学芸文庫、2010年、99頁）。

その意味でカヴァフィスの共感が「古代このかたギリシアの都市」であったアンティオキアにおける「[その時よければよい]というアンチオキア市民」のエピキュリアンの生き方にあったという、ロバート・リデルの指摘は正鵠を射ている（『カヴァフィス 詩と生涯』茂木政敏・中井久夫訳、みすず書房、2008年、274頁）。

リデルはこう書いている。すこし長くなるが今後の論旨の展開にとって重要なので引用しておこう。

いくら彼（カヴァフィス）がナジアンゾスのグレゴリウスを尊敬していたにせよ、四世紀のキリスト教徒に近い受け取り方をしていたとはとうてい思えない。たしかに彼はグレゴリウスの本が手に入らないため、幾つか書けないままの詩があると人に語っている。それでも、彼がユリアヌス詩編の語り手にキリスト教徒たちを仕立てたのはアイロニーであって、彼が反ユリアヌス側を好んでいたわけではない。ユリアヌスはペダンティックな気取り屋の堅物で、その彼が人工的に復興した多神教は清教徒的でくそまじめなものだった。カヴァフィスは、ユリアヌスもグレゴリウスもギリシャの過去として受け容れてはいるが、全体としてみれば彼の共感は「その時がよければよい」というアンチオキア市民（一二八）にあったようだ。この市民たちはキリストにもキリスト教皇帝コンスタンテウスにもさしたる不都合は感じず、むしろ髭面で陰気なユリアヌスにいらだっていた。カヴァフィスには、スウィンバーンのような背教者ユリアヌスへの感傷も、「偉大な王はかの高みに、心悲しみに満ちて」[十字架上のキリスト]への感傷もないからである。カヴァフィスはユリアヌスを面白味のない人物とっており、許せるのは、ただ一つ、敗者だった事実だけだったかもしれない」（同上、274-5頁。（ ）内は引用者補足）。

このようにみてくるとパワーソックによるギボンからの引用の第二パラグラフは『ひげざらい』に関連しており、第三パラグラフはまさしくユリアヌス自身の内にやどる「狂信という恐るべき情熱」が「キリスト教徒たちの受難の真相」と表裏一体をなしているということの表明なのだとということが了解できる。ギボンがローマ帝国衰亡の大きな原因のひとつとして、4世紀におけるキリスト教徒の勝利と膨大な「無為徒食の輩」（後期ローマ研究者であるA・H・M・ジョーンズの言葉、『ローマ帝国の崩壊—文明が終わるとのこと』南雲泰輔訳、白水社、2014年、73頁を参照）を収容する修道院制度の普及を挙げていることはよく知られている（『衰亡史5』、509頁）。また彼は、異教復活政策の一環として「エ

ピクロス派や懐疑派などの瀆神的教説は、現にこれらを侮蔑をもって嫌忌しなければならぬが、他方ピタゴラスやプラトン、ストア派などの学説は、逆に孜々として学習に励まねばならぬ』（『衰亡史3』、471頁）としたユリアヌスの哲学上の考えにも言及している。つまりパワーソックの意図とは異なって、ギボンは単純なユリアヌス擁護者ではなく、カヴァフィスは単純な反ユリアヌス派ではなかったのだ。ユリアヌスとカヴァフィスとの対立点はおそらくエピクロス哲学にあった。新プラトン派のヒュパティアの殺戮について伝説的な叙述（『衰亡史7』、149頁）を遺したギボンがエピクロス哲学をどのようにとらえていたかは不明である。だがかれはアレクサンドリアの総主教キュリオスの「狂信」や「柱頭行者シメオン」あるいは「学識あるオリゲネス」の自虐的な振る舞いよりは、ヒュパティアの美貌と知性、ひいてはエピクロスの生き方に好意的であったろう。二〇世紀最高のエピキュリアンであるE・M・フォースターはカヴァフィスを評してこう書いている。

主観的にも客観的にも、彼は時代の急務から遠く離れている。彼が王党派なりヴェニゼロス派なりの賛歌を作詞することは決してないだろう。彼は孤立者の強さ（と限界）を持ちあわせている。彼は世界が恐ろしいわけではないけれども、いつも世界にたいしてかすかに傾いて立っているのである。会話の際に彼が一文章まるまるを次の主題に宛てることがあった。それは、世界（に立ちまじること）と、世界から身を引くことと、どちらがよいことであろうか、ということで、カヴァフィスはどちらをもやってみた人ではあったが、その彼にも答えられないことなのである。だが、これだけは確かである、——人生には勇気が必要であり、勇気なくば人生にあらざ——ということだ（『C・P・カヴァフィスの詩』、『カヴァフィス全詩集』所収、429-30頁）。

1933年、自宅の向かいにあるギリシア人病院において70歳で亡くなったこの

詩人は、死の直前にギリシア正教に復帰したという。だがフォースターの文章から伝わってくるのは、まるまる「世界から身を引くこと」（「隠れて生きよ！」）もまるまるコミットすることもかなわず「世界にたいしてかすかに傾いて立っている」よりほかに、勇気をもって人生に立ち向かうことができないわたしたちの時代の運命なのだ。

ところで先述したもうひとりの現代ギリシアの作家であり官僚としても多方面で活躍したニコス・カザンザキスは、1927年にアレクサンドリアでカヴァフィスに面会したおりの印象を、後年に出版された著名な旅行記『旅の途次で』のなかでこう書いている。時にカヴァフィス64歳、カザンカキス44歳のときであった。

わたしの眼前にはひとりの完璧な人間、誇りと沈黙をもってみずからの芸術を成し遂げたひとりの男がいる。彼は好奇心、野望それに官能を禁欲的エピクロス主義 (an ascetic Epicureanism) の厳格な規律に服せしめている隠者のような首領である。(Kazantzakis, *Journeying: Travels in Italy, Egypt, Sinai, Jerusalem, Cyprus*. Translated by Themis Vasils and Theodora Vasils, San Francisco: Donald S. Ellis, Publisher, 1985. p. 74.; First published in 1974.)

わたしは「禁欲的エピクロス主義 (an ascetic Epicureanism)」という言葉を読んで、一瞬奇異な感じがした。エピクロス主義を「快樂主義」ととらえればこれは形容矛盾ではないのか？ もちろんそうではない。エピクロス主義の本義は「死後の生」という観念を断固として拒否しつつ、現世における生を快活にまっとうしようする生き方にほかならないからである。エピクロスはこう述べている。「永遠に（死後までも）つづくような恐ろしいものはなく、また長いあいだつづく恐ろしいものもない、ということについて、われわれに安心を与える認識（真の知恵の愛救による認識）と同じ認識によって、われわれは、この有限な存

在において、友情による損なわれることのない安全こそが最も完成されたものであることを、知る」(「主要教説 28」, 『エピクロス—教説と手紙—』出隆・岩崎充胤訳, 岩波文庫, 82頁)。「友情による損なわれることのない安全」を維持するためにこそ「克己」と「禁欲」が、つまりは野放図な自己主張ではなく自己抑制と他者への共感が必要なのだ。このように考えれば、カザンザキスがカヴァーフィスについてのべているのは、じつは彼の自画像でもあったのである。『その男ゾルバ』におけるゾルバの自由奔放さを「快樂主義者」と、そして作中の「本の虫」である「私」を「禁欲主義者」と解すれば、そういうことになる。じじつエレニー・カザンザキス夫人が『石の庭 (*Le Jardin des rochers*)』(清水茂訳, 読売新聞社, 1987年。原著はフランス語。舞台は日本と中国)に寄せた「日本語版のための序」にはこう書かれている。

私はあやうくこう言うてしまうところでした——彼は自由と人間の尊厳の謳歌者であり、誕生からはじまって死に到って閉じる世界を見つめ、どのような〔来世への〕希望をも蔑視しながら、同時に、一羽のカナリヤの囀りにも身ぶるいした。また、彼の鳥(生まれ故郷のクレタ島)の細かい砂の上で身じろぎもせず、おおいなる太陽に文字どおり身も心もひたりきっていたときには、彼の手にとまった一匹の蝶の翅の紅いろの鱗粉にも、うっとりとして夢想を走らせる人だったのだと(同上, 2頁。()内は引用者による補足)。

『背教者ユリアヌス(*Ιουλιανὸς ὁ Παπαβάρτης*)』という戯曲は、1939年に彼が英国滞在中にストラトフォード・アポン・エイボンにあるシェイクスピアの娘スザンナの家で執筆が開始され、1945年にギリシア語版が完成、アテネで出版され、1947年に著者自身による仏訳がなされ、翌年にパリで一度だけ上演された。その内容は原著が入手不可能なため断片的情報に頼らざるをえないが、そこに描かれたユリアヌスは「敗北を承知のうえで果敢に戦

う実存主義的英雄」(Brown, *op. cit.*, p. 233.), あるいは「彼を亡き者にしようとするキリスト教徒たちの陰謀に果敢に戦いを挑む」人物、すなわち「自由と自己実現への孤独な戦いのシンボル」(Vasilos N. Makrides, *Hellenic Temples and Christian Churches: A Concise History of the Religious Cultures of Greece from Antiquity to the Present*, New York: New York University Press, 2009, p.257. なおギリシア語サイト www.mixanitouxronou.gr/san-simera-gia-afrio-ioulian には公演時の写真も掲載されている) などのようである。

ところで先述したように今日のギリシアは、かつてはビザンツ帝国の一部であり、同帝国の公用語はギリシア語であり、ギリシア人は自らを「ヘレネス」としてではなく「ロミイ」(ローマ人)と意識していたという。オスマン帝国治下でも「ロミイ」意識は継続し、それはギリシア正教徒と同一視された。したがって民族的には異なるスラブ系、アルバニア系正教徒と同一の宗教的共同体「ルーム・レミット」を構成していた(村田奈々子『物語 近現代ギリシャの歴史』中公新書、2012年、9-10頁。本書は小著ながら、ローマについての塩野七生のように気風がよく、歯切れのよい文章は絶品である)。こうしたギリシアとローマの双方の流れをくむビザンツを、ギボンが徹底的に嫌っていた。

ギボンにとってビザンティンの歴史は「無力と悲惨についての退屈で代わり映えのしない物語」でなければならない。

ギリシアとローマの両国民の名を僭称しそれを辱めたビザンティン帝国の臣民は、ただ卑劣な悪徳の死せる単調さを示すのみで、これは何一つ人情味の弱さで柔らげられず、人目を驚かすような悪行の活力で生気づけられもしない。

ギボンが特に非難しているのは、ギリシア帝国がまったく袋小路に入ってし

まい、後世に何の遺産も残さなかったことである（ロイ・ポーター『ギボン—歴史を創る』中野好之ほか訳、法政大学出版会、1995年、208頁）。

ギボンが「人類が最も幸福だった時代＝パクス・ロマーナ」と称した五賢帝時代に最盛期をむかえた「ローマの文明は最終的に東ローマ帝国において滅び、二度と再生することはなかった」（同上、210頁）。『衰亡史』において「気前よく」異例ともいえる三章を割いてユリアヌスを描いたギボンは、他方でポーターも指摘しているように「彼は古きローマに忠実な皇帝で、当初の原理、特にその異教主義の復活を企てる。だが、時計の針をもとに戻すことはできない。それに、ユリアヌスにもまた欠陥が存在した。彼は帝国が移転した東方の魅力に、致命的なほどに感染していたのである」（同上、122頁）。コンスタンティヌス（大帝）が帝国の首都をコンスタンティノポリスに定めて以来、都市ローマは凋落し元老院も機能麻痺に陥り宦官に牛耳られる宮廷政治が帝国統治の中心になってゆく。その末路がビザンツならば、そして独立後2年目にしてギリシアの首都となったアテネは、当時は人口12,000の地方都市にすぎなかったとすれば、カザンザキスをはじめとする20世紀のギリシア人、さらにはEUの落第生のレッテルを貼られ、国家破産の危機に瀕している21世紀のギリシア人にとってのアイデンティティはどこにもとめればよいのだろうか？

カザンザキスとカヴァフィスには20世紀の東地中海に生まれ育った知識人という共通性がある。多文化状況と多言語状況——それもギリシア語とその他の言語の多様性というだけではなく、ギリシア語内における純正語カサレヴサと民衆語ディモテキの対立というダイグロシア状況（村田、前掲書、116頁）——のなかで生きた「旅の人」という共通性である。カザンザキスは1904年、24歳でギリシアを離れヨーロッパ各国を遍歴し、ヨーロッパ各国語、ロシア語、ラテン語、近代・古代のギリシア語を自由に駆使することができるようになった。パリで出会ったベルグソンの講義に感銘を受け、1909年にはニーチェに

かんする論文 (*Friedrich Nietzsche on the Philosophy of Right And the State*, New York: State University of New York Press, 2006. として英訳版が出版されている) で博士号を授与される。その後もスペイン, イタリア, エジプト, シナイ (1927年), ロシア (1925, 1929年), 中国, 日本 (1937年), ペロポネソス半島 (1937年), 英国=イングランド (1939年) を旅してまわり, それぞれについて旅行記を出版している。イングランド滞在中に戯曲『背教者ユリアヌス』を執筆してことは先にのべた。このイングランド滞在記 (*England: a travel journal*, London: Simon and Schuster, 1965.) については, 自分自身が偉大な旅人だったアメリカ人の旅行記作家ポール・セローが書評 (初出は *Encounter*, December 1972) を書いている。孫引きになるがカザンザキスのアイデンティティにかかわる文章なので引用しておく。

私はときどき考える。我々東洋人 (the Oriental) は, 責め苦にさいなまれた港に住み, 大気には幾千年にわたる願望がしみとおっているからこそ, ずる賢い老人さながら, 無垢で, 野蛮で, 若い北国へ行こうとするのだ, と。我々の目は永遠に, 貪欲に求めつづける。しかし少々くたびれていれば, わけ知り顔のあざけりもある。東洋の人種 (The races of the Orient) は, 老女のごとく重々しく, 原初の姿を持っている (『カザンツァキスの見た英国』, ポール・セロー『古きアフガニスタンの思い出』別宮貞徳・月村澄枝共訳, 心交社, 1988年所収, 55頁。() 内は引用者による補足。ただし邦訳書は原著 *Sunrise with Seamonsters: Travels and Discoveries 1964-84*, London: Penguin Books, 1985に取められたエッセイ 50編のうち序文をふくめ 24編を訳出したものである)。

シェフィールド, バーミンガム, リヴァプール, マンチェスターの荒廃した風景に「心痛」をおぼえたという「東洋人」カザンザキスの自己分析も, 若い国アメリカの旅行作家ポール・セローの英国観とくらべるとひたすらに「重苦しい」。このような心境の裡で執筆された戯曲『背教者ユリアヌス』の内容も

ユリアヌス帝の変貌

想像がつくというものだ。如何せん原文テキストが入手できていない現在、論評は差し控える。現代ギリシア人のシリミスがあえてユリアヌス帝を召喚した理由についても後日の考察にゆだねる。おそらくシリミスもユリアヌス帝が経験した「万人のディレンマ (everyman's dilemma)」からなにかを学ぼうとしているのだとはいえよう。「カザンカキス博物館」のサイト (www.kazantzaki.gr/index.php?level=4) にはプロットが英文で紹介されているので、それを要約しておこう。

登場人物：ユリアヌス、皇妃ヘレナ、ユリアヌスの元指導教師（キリスト教徒の司教）、皇帝の妻マリナ（寝室は共にするが性的関係はない。いわゆる情婦ではない）、ステファン (Stephen) という名の若者

舞台設定：363年、ペルシア遠征中のユリアヌスの最期

あらすじ：ユリアヌスはヘラス（古希臘）への信仰とキリスト教の倫理とに引き裂かれていた。司教はマリナに皇帝を誘惑して殺害するように命ずるが、彼女はユリアヌスに恋していたので殺害をためらっていた。キリスト教を迫害するユリアヌスの姿をみて、ユリアヌスがキリスト教徒へ改宗することを望んでいたマリアの内面の葛藤は強まってゆく。彼を亡き者にしようとする陰謀の元凶がマリナだと知ったユリアヌスは復讐に取り掛かる。手はじめに皇妃を呼んで骰子ゲームに興じたあとで、負けた皇妃は自殺をはかる。将軍たちは船での退却を進言するが、ユリアヌスは船を燃やし戦場に戻るように命じる。ステファンが背後からユリアヌスに殴りかかり、司教はマリナにユリアヌスを殺すようにうながす。しばらくためらったあとでマリナは、傷ついたユリアヌスと毒入りワインを飲んで果てるのだった。

いずれにせよ彼は一生旅人だった。彼の墓には「何も欲せぬ。何も恐れぬ。我は自由なり」(Δεν ελπίζω τι ποτα / Δε φοβούμαι τι πο

ユリアヌス帝の変貌

τα / Εἰμαίλεφτερος)」と刻まれているという。今では人びとを旅へといざなうように、彼の生まれ故郷クレタ島のイラクリオンの空港には彼の名が冠され、彼の銅像が建てられている。

アレクサンドリアの隠者のようなカヴァフィスもまた「英国人とエジプト人を父母として英領スーダン（当時のエジプトスーダン）に生まれ、英文で多作し、晩年はアテネで暮らした人である」（ロバート・リデル、前掲邦訳、「訳者解説」、331-2頁）。彼は「植民地エジプトで暮らし、ギリシアのパスポートを所持し、国籍は英国だった。彼が生まれたのはコンスタンティノープルで、ロンドンとリヴァプールで育ち、成人として生涯の大半を、ギリシア、イタリア、英国、そしてフランスのディアスポラ・コミュニティを移動しながら生きたのだった」（Peter Murphy, “The City of Ideas: Cavafy as Philosopher of History”, in: *Modern Greek Studies*, Vol. 11, 2003. p. 75.）。

ところでカザンザスキは戯曲『背教者ユリアヌス』を執筆する以前から、散文でユリアヌスについての著作をものしようと思っていたが、メレシコフスキの著作を読んで、完成をあきらめたという。その理由は『神々の死：背教者ユリアヌス』が彼にひじょうな不快感をもたしたからであった。とくに「ふたつの相争う宗教システムを調和させようとする」メレシコフスキの熱意、ユリアヌスとキリスト教との対立の仲介人になろうとするギリシア人の若い女性彫刻家アルシノエ（Arsinoe）に象徴される「融和的仲裁主義（compromising eirenicism）」は、カザンカキスがもっとも嫌悪するものだった（Syrimis, *op. cit.*, pp. 90-91.）。じじつわたしは『背教者ユリアヌス—神々の死』（米川正夫訳・米川哲夫補訂、河出書房新社、1986年）のつぎのような結末を読んで、呆然としたことをおぼえている。

牧夫の笛の澄んだ響きは、キリスト教の祈祷の言葉と融け合って、高く高く天まで昇っていくのであった。…（以下略）…

けれども、アナトリウスとアミアヌスとアルシノエの胸には、まるで没することのない太陽のように、すでに偉大なる復興の喜びが宿っていたのである（同上、342頁。強調は引用者。アナトリウスはアミアヌスの友人）。

「いったいユリアヌス帝の戦いはなんのためだったのか？習合主義、折衷主義、混淆主義（シンクレティズム）もここまでくるか！？」というのが、嘘偽りのない感想だった。それとともに習合主義の本家本元たる日本において、ある時期までメレシコーフスキイが一種の流行作家・思想家だったのはなぜなのかという疑問もわいてきた。『背教者ジュリアノ』（鳥村琴二訳、ほととぎす発行所、1910（明治43）年）が『ホト、ギス増刊第三冊』として鳴り物入り——ケーベル博士と歐外博士の「序文」を付して、さらに『ホト、ギス』前号（第三巻二号）には折蘆生「『背教者ユリアヌス』の序文に就いて」が掲載され、そこではケーベル博士の「序文」の原文と翻訳が掲載されている——で翻訳・出版されて以来、いったいだれがどのようにこの本を読んだのだろうか、読者は「ジュリアノ」のなかになにを読みとったのだろうか？こうしてわたしのつぎなる旅は20世紀初頭の日本ということになる。——To Be Continued….

（注1）当初文芸雑誌『海』に1969年7月号（創刊号）から1972年8月号まで連載され、1972年10月に中央公論社から単行本が刊行された。本書執筆にいたる経緯については、さしあたり「『海』と『背教者ユリアヌス』」（『のちの思いに』日本経済新聞社、1999年、261-5頁）を参照。

（注2）ちなみに讃美歌『世の成らぬさきに』（245）はこの詩の冒頭の一行“Of the Father's love was begotten Wisdom, and the same is the Son”からとられている。マイケル・A・スクリーチ『モンテニューとメランコリー』（荒木昭太郎訳、みすず書房、1996年、136-7頁）を参照。スクリーチは当該箇所「プルデンティウスが、イギリスの読者たちによく知られているのは、クリスマスの讃美歌『父の神の心から生まれでて』によってだ」と書いているが、わたしがしるかぎり「父

の神の心から生まれでて」というクリスマス・キャロルは存在しない。プルデンティウスの翻訳としては『日々の賛歌・霊魂をめぐる戦い』（家入敏光訳、創文社、1967年）があるが、この護教詩は訳出されていない。

- (注3) この戯曲については Konrad Eisebichler, “How Bartelome Saw a Play, in: *The Renaissance in the Streets, Schools, and Studios: Essays in Honour of Paul F. Grendler* (Essays and Studies, Volume 16), Toronto: Centre for Reformation and Renaissance Studies, 2008 を参照。なおクリストファー・ヒッパート『メディチ家—その勃興と没落』（遠藤利国訳、リプロボート、1984年）第一部13章「ロレンツォ—パトロン・コレクター・詩人」には、文人としてのロレンツォがよく描かれている。
- (注4) Luther and Calvin, *On Secular Authority*, edited and translated by Harro Hopel, Cambridge Texts in the History of Political Thought, 1991, p. 17. には編者補足として “many others under the Emperor Julian [the Apostate]” とされており、当該箇所（注）として “Luther is here using illustrations from the popular legends of the Old Church.” と記されている。
- (注5) 16世紀後半のフランスにおける「寛容」思想の成立については、当時の錯綜した議論を見事に整理・分析した、宇羽野明子『政治的寛容（大阪市立大学法学選書）』（有斐閣、2014年）を参照。
- (注6) ギボン以後の英語圏のユリアヌス関連文献については、ネット上のサイト（What Came After Gibbon）が充実している。ラテン系の文献については *L'Empereur Julien: De l'histoire a la légende (331-1715)*, Paris: Les Belles Lettres, 1978. が優れている。ギボン以前のものについては本論でもいくつかふれたが、よりくわしい文献案内は（What Apeared Before Gibbon）として本論文完成時には提示する予定である。
- (注7) フォースターが20世紀最高のエビキュリアン宣言「私の信条（What I Believe）」において民主主義には万歳二唱で十分であり、三度の喝采に値するのは「自由を糧として生きるわが恋人、慕わしき共和国（Even love, the beloved Republic, that feeds upon freedom and lives）」だとのべたとき、彼が引用しているのは、ほかならぬスウィンバーンの詩 “Hertha” の一節である。
- なおスウィンバーンの詩 “The Last Oracle (A. D, 361)” には “And dying, *thou hast conquered*, he said, *Galilean*; he said it and died.” という一節があり、エピグラフとしてつぎのようなギリシア語の文章が掲げられている。
- （「王に伝えて下さい、輝かしい神殿は崩れ落ち、そして、かつて話し声のように、にぎやかな音をたてていた泉の水も枯れ果ててしまったと。／神のために残された部屋はただのひとつもなく、屋根の覆いもすべてなくなってしまって

ユリアヌス帝の変貌

いました／神の手の中で、予言の月桂樹の花が開くことは、もはやありません。〕。訳文は上村森人『スウィンバーン研究』（溪水社、2010年、121頁）に拠る。このギリシア語の文章は、本文中に英訳されて組み込まれている。いうまでもなくダフネの森のアポロ神殿炎上を伝える使者の言葉である。

(注8) テミスティウスについては、西村昌洋「テミスティウスにおける『哲学』と『哲学者』」、『西洋古代史研究』第8号、2008年を参照。

(注9) わたしの手元にあるものだけでも Robert Charles Wilson, *Julian Comstock: A Story of 22nd Century America*, New York: A Tor Book, 2009; Adrian Goldsworthy, *In The Name of Rome: The Men Who Won The Roman Empire*, London: Weidenfeld & Nicolson, 2003; Michael Curtis Ford, *Gods & Legions: A Novel of the Roman Empire*, London: The Orion Publishing Group Ltd, 2002; Darrel Schweitzer, *We Are All Legends*, Gillette, NJ.: Wildside Press, 1981; Paul Waters, *The Philosopher Prince*, London: Macmillan, 2010 (ちなみに本書のエピグラフにはレオ・シュトラウスのクセノフォン論からの一節が引用されている); Adorian Murdoch, *The Last Pagan: Julian The Apostate and the Death of the Ancient World*, Gloucestershire: Sutton Publishing Limited, 2003. がある。

(注10) ヴィダルの『ユリアヌス—ひとつの小説』はリバニオスと5世紀の歴史家・外交官・修辞学者プリスコス (Priscus) との往復書簡というかたちで始まり、ついでユリアヌス自身の『回想録』が提示され、その合間にリバニオスとプリスコスのコメントが入るといった複雑な構成をとっている。ヴィダルは回想録 *Point to Point Navigation: A Memoir 1964 to 2006*, London: Abacus, 2007, p. 53-4. において、ヒューストンの本屋では本書が出版されるや即日完売になったと書いている。プリスコスの代表作は *The Fragmentary History of Priscus: Attila, the Huns and the Roman Empire, AD 430-476. Christian Roman Empire series, 11.* translated by John Given (Merchantville, NJ: Evolution Publishing, 2014) として出版されている。なお Book-length ではないが19世紀アメリカの合理主義者で自ら「不可知論者 (agnostic)」を名乗る Robert Green Ingersoll, *The Great Infidels* (1881) には“Julian the Apostate and Giordano Bruno” という一章がふくまれている。

(注11) この著作については、南雲泰輔「ユリアヌス帝の意識のなかのローマ皇帝—『ひげざらい』における法律意識の分析を中心に—」、『西洋古代史研究』第6号、2006年を参照。

(注12) ユリアヌスにとってのイェルサレムのユダヤ寺院再建計画の経緯については R・L・ウィルケン『ローマ人が見たキリスト教』（三小田敏雄ほか訳、ヨルダン社、1987年、第IV章「背教者ユリアヌス—ユダヤの律法とキリスト教の真理」を参照。たとえばウィルケンはこうのべている。「ユリアヌスの夢は生き続けた。そして、

彼に対するキリスト教徒の反論の辛辣さは、彼が彼らの気にさわる部分に触れたことを示している。…（中略）…ユリアヌスの神殿再建の計画は、成功しなかったとは言え、古代におけるキリスト教の争いの中でも、最後の、そして最も輝かしき一撃であった」（同書、304－5頁）。卓見というべきであろう。この優れた翻訳書が版元倒産のため、中古市場においてさえ入手不可能な状況にあることはまことに残念である。なお Jeffrey Brodd, “Julian the Apostate and His Plan to Rebuild the Jerusalem Temple,” in: *Bible Review*, Vol. XI, No. 5, October, 1995 をも参照。
 (注 13) カヴァフィスの「ユリアヌス詩編」については、G. W. Bowersock, “The Julian Poems of C. P. Cavafy”, in: *Byzantine and Modern Greek Studies* 7 (1981) および未刊行草稿については、Renata Lavagnini, “The Unpublished Drafts of Five Poems on Julian the Apostate by C. P. Cavafy”, in: *Byzantine and Modern Greek Studies* 6 (1980) を参照。なお未完におわった詩編をあつめた *C. P. Cavafy: The Unfinished Poems*, Translated by Daniel Mendelsohn, New York: Random House, 2009. には “The Rescue of Julian” と題する、下記の詩が収録されている。

When the frenzied soldires slaughtered
 Constantine’s relations, after he had died,
 and finally the dreadful violence
 endangered even little child—six years old—
 of the Caesar Julinus Constantius,
 the Christian priest, compassionate,
 found him and brought him to asylum
 in the church. There they rescued him: Julian at the age six.

Still it’s absolutely essential for us to say that
 this information comes from a Christian source,
 But it’s not at all unlikely that it’s true.
 Historically speaking, there’s nothing that seems
 incredible: the priest of Christ
 rescuing an innocent Christian child.

If it's true—could it be that the very philosophical
Emperor made it clear in this as well, with his
“let there be no memory of that darkness.”

付記：次回以降の論述の必要上、以下にメレジュコーフスキイ（メレスコーフスキイ）『基督と反基督（1）神々の死（背教者ジュリアン）（全）』（『世界文藝全集』第三編、米川正夫訳、新潮社、1921（大正10）年）のわたしの手による要約を「付録」として掲載する。本書はメレシコーフスキイの歴史小説三部作『キリストと反キリスト』の第一部を成すもので、第二部は『レオナルド・ダ・ビンチ—神々の復活』（旧版は岩波文庫、全四巻、邦訳書名は『神々の復活—レオナルド・ダ・ビンチ』、なお別版として英訳からの重訳である『先覚（全）』、戸川秋骨訳、国民文庫出版会、1915（大正4）年がある）、第三部は『反キリスト—ピョートルとアレクセイ』（邦訳書名は『ピョートル大帝—反キリスト』）であり、いずれも河出書房新社より出版されている。

なお本書については以下の各版がある。①『背教者ジュリアン』島村琴二（本名：盛助）訳、ほととぎす発行所、1910（明治43）年；②『神々の死—The Death of the Gods』松本雲舟（本名：赴）訳、商文堂書店、1911（明治44）年、近代デジタルライブラリーより入手可能（英訳版 *Christ and Antichrist: The Death of Gods*, translated by Herbert Trench. からの第一編だけの訳。原著者からの版權譲渡の書簡と写真あり。ただし原著者は翻訳者を女性だと間違えている。巻末に続編刊行が予告されているが未刊。予告文には「偉大なる希臘主義者ジュリアンは遂に皇帝となりぬ。彼はいかなる態度にて当時の基督教に對せるや、我等の好奇心を喚起すること深し。／＼本書の続篇に於いては彼が短くして光彩陸離たる治世を描写して、その死に至る当時の状況紙上に踊って眼の當り見る如し。これをこれを日本現代の状況に較ぶれば暗示せらるゝ所極めて多し、文藝に志ある者は勿論、苟くも日本現代の思想界の趨勢を憂ふる者、本書に就て學ぶ所あらざる可からず」とある。原著者による版權譲渡の書簡があるにも

かかわらず、また本書の扉には「翻訳権所有」と明記されているのにもかかわらず、なぜ島村訳が先行したのかの理由については不明であるが、訳者による「本書出版について」によれば史実との照合、ラテン語訳の困難、不明な単語の確認等で手間取ったらしい。本書に付された「歴史上のジュリアンと其の時代」は要をえた解説である。なお松本は『クオ・ヴァディス』（邦訳題名：『何處ニ往ク』）の本邦初訳者でもある。）；③『基督と反基督（1）神々の死（背教者ジュリアン）（全）』、米川正夫訳、世界文藝全集第三編、新潮社、1921（大正10）年（英訳版からの重訳）；④原著第一編の改訳、新潮文庫、1936（昭和11）年；⑤原著第二編の改訳、新潮文庫、1938（昭和12）年；⑥『背教者ジュリアノ／メレジュコフスキイ作』、船田享二訳述、春陽堂、春陽堂譯述叢書、1924（大正13）年；⑦丸川仁夫『神々の死、ノートルダム大寺院、天路歷程』（メレジュコフスキイ〔著〕、ユーゴオ〔著〕、バンヤン〔著〕、世界名作物語 第2巻、新生堂、1938年。翻案）；⑧『背教者ユリアヌス—神々の死』（米川正夫訳・米川哲夫改訂、河出書房新社、1986年）[「改訂と翻訳に用いたロシア語の底本は、『メレシコフスキイ全集』（スイチン社、一九一四年、モスクワ）第一—五巻である」との記述がある]。ほとんどの翻訳書が底本に言及していない。以下に掲載するのはあくまでも③の要約である。

『背教者ジュリアノ』（島村琴二訳、ほととぎす発行所、1910（明治43）年）については神山圭介「『背教者ユリアヌス』とその作者」（菅野昭正編著『作家の世界 辻邦夫』番町書房、1978年）において、「この作品が、『ホトゝギス』の増刊にケーベルと森林太郎の序をつけて、島村琴二訳『背教者ジュリアノ』として訳出、一挙掲載されたのは明治四十三年であった。分厚い一冊がすべて『背教者ジュリアノ』なのだが、ドイツ語からの重訳で、しかも抄訳ではないかと思われた。…（中略）…米川正夫訳の『神々の復活』に落胆した記憶もあって、はじめて手にしたときはひどく珍しい気がしたのに、古風な訳文を眺めているうちに『背教者ジュリアノ』を読む意欲が失われてしまった。（序文は面白かった。）」と書かれている。妥当な評価といえよう。なお神山氏の『背教者ユリアヌス』論自

体は、数ある辻邦夫論のなかでも出色である。神山氏がいう「ドイツ語版」とは *Julian Apostata der letzte Hellene auf dem throne der Ca'saren: Historischer roman* von Dmitry Sergejewitsch Mereschkowski; Deutsch von Carl von Gütschow (1912) あるいは *Julianus Apostata historischer Roman* von Mereschkowski, Dmitri; übersetzt von Alexander Eliasberg (1912年?) と思われるが、出版年が合わない。

また1919年にはウーゴ・ファレナ原作のイタリア映画『背教者ジュリアノ(原題: Julian The Apostate)』が公開されているとの情報もあるが、筆者は未確認である。Movie Walker (<http://movie.walkerplus.co./mv14831>) によれば作品概要は下記のとおりである。

多神教徒とキリスト教徒との間に起った争闘を書いてある時代劇である。オリンポスの神を信ずるジュリアノが厚い信仰心から起る不敵の勇、それに依ってローマ人と争い、終に一矢に依って命を奪われるまでイタリア物には似合わしい作品である。美しい着色と大仕掛けな舞台装置が見物。無声。(全四篇)

物語：父を失い、母を失った憐れな少年ジュリアノは兄のガルスと唯二人で生活していた。ジュリアノに取って唯一の忠実なる伝育官マルドニウスはジュリアノの肩に手を掛けて話した。「ガリレア人は我々の先祖を亡ぼし、オリムプスの神に対して無礼を働いた。我々は立たなければならぬ」と。ジュリアノは自分の父ユリウスを殺した仇敵を決して忘れなかった。亡ぼされたオリムプスの神のため、一生を通じてジュリアノはキリストの敵として闘うべく信仰心は燃え上った。彼は成長して立派なる若者となったとき、コンスタンティヌス大帝の使者は来て彼を拉致し去った。彼は従容として宮中に赴いた。我が一族の血に染められた手に接吻するとき、彼の血潮は湧き

ユリアヌス帝の変貌

起った。ギリシャの妖女、艶なる姿の皇妃ユーセビアはジュリアノに対して恋をしたのであった。多くの将卒は皆ジュリアノを慕った。そして彼のためには犬馬の労も厭ではなかった。ジュリアノの軍勢がダリューブの河岸に進んだ事を聞いたコンスタンティヌス（ママ）は驚いて急ぎ帰ったが不幸にして途中病に斃れた。ユーセビア皇妃はジュリアノを誘惑せんとしたが鉄石の如き彼には何の効果も奏しなかった。ジュリアノの軍は常に勝った。が人心は次第にキリスト教に向って走り、孤独の悲哀を味わねばならなくなった。勇敢なローマの軍と勝負を決した時ジュリアノは戦死した「ガリア人よ汝は勝てりキリスト教は勝てり」とは彼の最後の悲しい一語であった。

原題：Julian The Apostate；制作年：1919年；制作国：イタリア；配給：国活

原作：ウーゴ・ファレナ

キャスト：ジュリアノ（グイド・グラジオン）；ユーセビア（イリーナ・レオニドフ）

コンスタンティウス（イグナシオ・マスカルチ Ignazio Mascalchi）；オリバシウス（クラウディオ・カバレリ）；その他大勢

付録

訳者による「序」（省略）が付されている。各章の「見出し」はジョンストン版 (*Julian The Apostate*, translated by Charles Johnston, Philadelphia: Henry Altemus, 1899.) にしたがった要約者による補足。なお他の英訳版としては *Christ and Anti-Christ, The Death of the Gods*, translated by Herbert Trench, 1901=Authorized translation がある。

第一（編）部

1. スクージロと魔術師 (Scudilo and the magician)

ユリアヌス帝の変貌

舞 台：カッパドキアのカイザリアから 20 町ばかり離れた所。

登場人物：スクージロ、プブリウス（第八、百人隊長）、ヘルヴィジウス（カイザリアの知事）

あらすじ：スクージロとプブリウスが、マセルムに幽閉されているジュリアンとガルス——コンスタンティヌス大帝の甥で、現皇帝コンスタンティウスの従弟に当たる、不幸なフラヴィウス家の末裔——を捕えようとする。コンスタンティウスは即位に際して、競争を恐れるあまり肉親の叔父ジュリウス・コンスタンティウス——ジュリアンとアルスの父で、かつコンスタンティヌス大帝の弟——をもふくめて多数の者を殺害したのであった。ジュリアンと異母兄ガルスは年少のゆえに殺害は免れたが、日々死の恐怖のもとで暮らしていたのだった。

2. ジュリアンの夢 (Julian's dream)

舞 台：マセルム城

登場人物：ジュリアン、マルドニウス（老教師、宦官、異教徒）、ラブダ（ジュリアンをコンスタンチヌス大帝の唯一の正当なる相続者と信じ、現帝コンスタンチウスを人殺しの王位泥棒だと思い込んでいる老婆）、兄ガルス（病身）

あらすじ：ジュリアンはコンスタンチヌス大帝の悪行の悪夢に悩まされる。かつてフラヴィウス家の地下の墓場でニコメジヤのエウセヴィウスに案内された一隊によって捕縛され、無理やり十字架に接吻させられた夢をみる。スクージロー隊が兄弟を捕えようとするが、マルドニウスの機転によって助かる。

3. 僧侶エウトロピウス (The Monk Eutropius)

舞 台：同上

登場人物：アリウス派の長老エウトロピウス（ジュリアンの後見人エウセヴィ

ユリアヌス帝の変貌

オスによって選定された教師)、マルドニウス(ジュリアンお気に入りの教師)

あらすじ：エウトロピウスによる異教(異端邪説)批判が延々とつづく——「気の狂った」老人ピタゴラス、「プラトンの謔言」、「ソクラテスの教は不合理」、「しかし彼の心に特別な憎悪の念を喚び起したのは、エピクーロスであった」。それに反しマルドニウスが語るギリシア哲学・文学への賛美がつづく——「ソクラテスは何人にも憐憫を乞わなかった。一切の権力、一切の国法も、人間の心の自由と比すると何物でもなかった。…」」。宗教問答編の授業の後、ジュリアンは庭に駆け出し、洞窟のなかで『饗宴』を読んだり、玩具の船「リブルニアの兵船」で遊んだりして無聊をなぐさめる。

4. 聖モーリス教会(The Basilica of Saint Maurice)

舞 台：アポロの神殿の石をそっくりそのまま持ってきて建てられた教会。

登場人物：同上、フェオドオラ(老婆)

あらすじ：ジュリアンは『黙示録』を読む。教会の円天井にはアリウス風の基督像——「厳めしい瘦せた薄黒い顔は金色こんじきの光を放って、頭には東羅馬帝国(ビザンチン)皇帝の冠たる冠(ゲイトテム)を頂いている…左の手に一冊の書物を持ってゐたが、其の書物には『汝等やすきに平安あれ、我は世の光しるなり』という文字が記されてあった。彼は壮麗な玉座に坐ってゐた。そして羅馬の皇帝が——ジュリアンにはコンスタンティウス大帝の様に思はれた——その足に接吻してゐるのであった」。そして「ジュリアンは嘗てマルドニウスから聞いた『ガリラヤ人』という言葉を、口の中で囁いて見た」。…「がそれは敬虔の念の為ではなくて、一生

解く事が出来ぬ運命から定められた、此の秘密に対する恐怖の為であった」。

5. ウェヌスの神殿 (The Shrine of Venus)

舞 台：マセルム、アフロジテの神殿

登場人物：ジュリアン、神殿の祭司オリムピオドール、アマリリス（祭司の娘、許嫁あり）、サイキー（祭司の末娘、隠れキリスト教徒）、ジオフィナ（祭司の妻）

あらすじ：ジュリアン、アフロジテの神殿の近くの野原で姉妹と戯れる。アマリリスに玩具の船「リプルニアの兵船」を差し出すが、子供っぽいと笑われる。ジュリアンは「アフロジテ・アナジロン」の白い裸身の前に跪き、身を屈めて彫像の足に接吻しながら、彼はこう言うのだった。「アフロジテ！アフロジテ！私は永久にあなたを愛します。涙は大理石像の足に落ちた」。

6. ガルスと踊る娘 (Gallus and the dancing girl) [新潮社版では「四」になっているが、文庫版では「六」に訂正されている]。

舞 台：セレウキア（シリアの商港・大アンチオキアに臨む薄汚い町）

登場人物：アガメムノン（変装したガルス）とその連れ（廷臣グリコン）、ミルムクス（ギリシア人）、フィーリス（コルコダスの踊り子、ヌビヤ人）、プリアポスの祭司スカブラ（老婆）、

あらすじ：マセルム幽閉から六年目、ジュリアンは一九歳になりコンスタンチノーブルに呼び出され小アジアの各地を旅することを許され、ガルスは副帝に任じられ東方ローマ帝国の統治を委ねられる。その間にガルスは当地で遊女買をしたり、異教徒からはキリスト教徒として乱暴狼藉に及ばれたりする。そのときコンスタンティウスからは「メジオラヌム（ミラノの古称）に招聘するとともに、ガルスの唯一の護衛兵たるアンチオキア駐屯の二

ユリアヌス帝の変貌

個連隊をコンスタンティウスの許に派遣せよとの命令」が届く。
妻のコンスタンチナは一足先にアンチオキアに旅立つのだった。

7. 神のごときイアンブリコス＝ヤムヴリコス (The godlike Iamblichus)

舞 台：エフェソス (現トルコ)

登場人物：ジュリアン、ヤムヴリコス (有名な妖術家、ソフィスト、カルキア生まれの老人、新プラトン派のポリフィリウスの弟子)

あらすじ：希臘教(ヘラス)の容智(ロゴス)を求めていた一九歳のジュリアンはヤムヴリコスに教を乞うが、「神というのは外でもない、世界の否定だ、現に存在する一切の否定だ。神は無であり、且つ一切である！」という老師の言葉によっても、ジュリアンの深い「憂愁」は癒されることはないのだった。

8. 寺院の破壊 (The destruction of the temple)

舞 台：同上、アルテミスの神殿

登場人物：同上、

あらすじ：キリスト教徒によるアルテミス神殿の破壊。ジュリアンはコンスタンティウスの間諜に気づき、焚火のなかに薪の束を投げ入れられる。キリスト教徒は松明の光でフィルミクス・マテルヌス『邪宗弁妄論 (De errore profarum religionum)』の一節を読む。

9. 徴を探しもとめて (Seeking a sign)

舞 台：ベルガモンの宮殿

登場人物：ジュリアン (一九歳)、若いソフィスト・アントニウス (エジプトの女預言者ソシパトラと新プラトン学派のエデシウスの間に生まれた子供)、エウセヴィウス (エデシウスの弟子、ミンド生まれの胆汁質の嫉妬深い人間)

あらすじ：ジュリアンは昼にはキリスト教徒になりすまし、夜にはベルガモンの図書館で修辞学者リバニウスの著作を研究したり、ソ

ユリアヌス帝の変貌

フィストたち——ペルガモン生まれのエデシウス、サルジニア生まれのクザンチウス、テスプロスのプリスクス、ミンドのエウセヴィウス、プロエレスやニムフィジアンなどの講座を訪れたりする。彼らはジュリアンを煩がるがエウセヴィウスだけは「マムシムス」を訪ねるように助言するのだった。

10. エフェソスのマクシムス (Maximus the Ephesian)

舞 台：秘術を行なう大道場

登場人物：エフェソスのマクシムス（大導師、七十歳の老人）、オリバシウス（アレクサンドリア学派の医師で実在の人物）

あらすじ：秘術によってジュリアンはヘラクレス、墮天使の夢をみる。「もし大天使が見たければ（キリストを）斥けるがいい！」との墮天使の命令に対して、ジュリアンは三度「斥けます」と応じる。大天使は「わしはすべて生ける者のために悲しんでゐるのだ。生も要らぬ、死も要らぬ。わしの傍へ来い。わしは陰だ、わしは平和だ、わしは自由だ」と叫び、自らが「悪」であり、『彼』に叛いたことを告白する。

さらに大天使はイエス・キリストもギリシアの神々もひとしく真理でありいずれもが自由を得たのだと説く。それを認めることがいやなら「強く自由になれ、憐れんだり、愛したり、赦したりしないで、叛逆するのだ、一切を征服するのだ。信じないで知るのだ。さうすれば世界はお前のものだ。…お前は皇帝になれるのだ。…」と語る。

その後ジュリアンと大導師は書物庫、解剖室や実験室を訪れる。そこにはマクシムスの若い友人オリバシウスがおり、マクシムスがジュリアンを誑かしたことを非難する。それにたいしてマクシムスは「わしはあれ（ジュリアン）が好きなのだ。わ

ユリアヌス帝の変貌

しは死ぬ迄あれの傍を離れまい。わしはあれを偉大な自由な人間にして遣るのだ」と応じるのだった。

11. 囚われ人ガルス (Gallus a prisoner)

舞 台：コンスタンチノーブル

登場人物：ガルス、審問官レオンチウス、バイノパウデス（スクタリの盾持兵の隊長）、侍従官ルシリアン、スクロージ、タウリス（アルメニアの審問官）、エウゼヴィウス（皇帝付きの密偵）

あらすじ：兄と再会し、兄の妻コンスタンチナ（コンスタンテウスの妹、不美人）の死亡を知る。ジュリアンは兄を「善良な獣」と呼ぶ。一夜を歓談して過ごしたのちガルスは、コンスタンテウスの意図を知りながらもコンスタンチノーブルを出発しミラノに向かう。途上、ノリクム（東アルプス地方）で皇帝の使者（侍従のバルバチオンとアポデムス）に会う。以後は囚人扱いされ、（同性愛者らしき）スクロージに付きまといわれ、イストリアのポーラ要塞で、アンチオキアでの殺戮事件の責任をコンスタンチナに転嫁した罪により死刑を宣告される。処刑人は「（切り落とされたガルスの）口の中へ指を突っ込んで、嘗ては多くの人の頭を垂れさせた首を運び去ったのである」。ジュリアンは兄の死を聞いて、『今度は俺の番だ』と思うのだった

12. 狩りの女神ディアナ (Diana the huntress)

舞 台：アテネ

登場人物：プブリウス・オプタチアヌス・ポルフィウス（詩人）、狩りの女神アルテミス（本名不明）、ミルラ（一二歳ばかりの女の子）、メロエ（女奴隷）、ナジアンゼンのグレゴリー（偉大なキリスト教の宣伝者）、カイザリアのバジル（同）

あらすじ：ジュリアンは天使の位を受けて、僧門に入る。プブリウスと知

り合い、アテネ郊外の野原で「真裸の若い女」が円盤投げに興じる様子を見る。プブリウスはかつて皇帝を揶揄した詩を書いたために財産を没収され、エーゲ海の孤島に流される。孤独に耐えられずプブリウスは皇帝を賛美する詩を作り、皇帝からアテネに戻ることを許されるが、財産は返還されず。けれども彼のヘラス（古希臘）に対する愛は衰えなかった。グレゴリーとバジルはジュリアンとプブリウスの姿を疑惑の目でながめるのだった。

13. 神々の晩餐会 (Nights and Supper of the Gods)

舞 台：アテネ、ピレウスから程遠からぬアルシノエの別荘

登場人物：マルメチウス（アテネで人気のある弁護士）、ランプリジウス（雄弁術の教師）、ヘフェスチオン（ランプリジウスの弟子）、ガルギリアン（ローマの地方庁の官吏、美食家）、アルシノエ（ローマの元老ホルテンシウスの養女、ローマの元老ヘルヴィジウス・プリスクスの実の親、彼はコンスタンティヌス大帝治世の晩年に逝去、ゲルマンから捕虜にしてきた女に産ませたのがアルシノエとミルラ）

あらすじ：冒頭でマリメチウスが「神々が果敢ない人間を此の世へ遣はされたのは、彼等をして美しい言葉を語らしめん為である」と語ったことをめぐり、詩、弁舌、修辞、美食などについて会話がはずむ。中盤になってジュリアンとプブリウスが登場。ジュリアンは、キケロを引用しながら弁舌にとっては内容よりも言葉の音とリズムが大事だと説くマルメチウスに反感を抱く。

そのとき「銀の様に柔らかい毛で織った古代雅典風のペプラムは、胸の下の所で細い帯に締められ乍ら、長い直線も襷を下まで垂らして居た」アルシノエが現われる。彼女は一月前「ジュリアンが荒れ果てた競技場で見た、かの円盤投げの女であっ

た]。「一時アルシノエは科学に没頭して、アレクサンドリアの博物館で、著名な学者達に就いて研究していた。彼女はエピクルスや、デモクリトゥスや、ルクレチウスの物理に魅惑されて了つた。此の研究が彼女の気に入った譯は、『神々に対する恐怖から』解放して呉れるからであった」(アルシノエのモデルは「ヒュパティア」かも?)。アルシノエは晩餐に集まった人々を軽蔑の眼で見やる。ガルギリアンはセネカの「文学上の不節制(Litteratum intemperantia laboramus)」という一節を引用しながら自己嫌悪と倦怠の表情を浮かべるのだった。

14. ジュリアンとアルシノエ (Julian and Arsinoe)

場 面：パルテノンの丘

登場人物：ジュリアン、アルシノエ

あらすじ：アルシノエはジュリアンに「あなたは私の敵(キリスト教徒)なのかと問い詰めるが、ジュリアンはしどろもどろになる。アルシノエは「ねえあなたは権力を望んでいらっしゃるのでせう」と迫る。ジュリアンは「権力」という一語に触発され、「権力!」…「お々、若し仮令一年でも、いや数ヶ月でも数日でも権力を与えられたなら、私はあの基督教徒と称して、地びたを這ひ廻つてゐる毒蟲共に、彼等自身の賢なる教祖の言った『ケーザルの物をケーゲルに返せ』といふ言葉の意味を教へてやるんだがなあ!私は太陽の神に誓つて言ふが、私に権力が与えられたら、彼等は悉く、ケーザルの物をケーゲルに返すに相違ありません!」と語る。その後本書でもっとも艶めかしいシーンが続く。翌朝ナジアンゼンのグレゴリーとカイザリアのバジルは聖像の前に跪くジュリアンの姿を見る。ジュリアンは皇帝の宮中に向かうのだった。

15. コンスタンティウスの宮廷 (The court of Constantius)

場 面：ミラノの宮廷

登場人物：エウセヴィオス（侍従長）、皇帝付きの理髪師（宮廷付きの僧正ウルサキウスとバレンチンによって買収され、アリウス派の教義を皇帝に吹き込む）、パウロ・カテナ（記録係＝密偵）、メルクリウス（若い食卓係＝密偵）、エウセヴィア、パフヌチウス（祭司、アタナシウス派）、オジウス（ニケーア大会議時代の老人、アタナシウス派）、トロフィス僧正、フィゾ祭司、アエチウス（アンチオキアの助祭、アリウス派の過激派）、テオナ（マルマニクの長老、アタナシウス派）、ソフロニウス（ボムペリポリスの長老、アタナシウス派）、ナルシス（ネロニアから来た僧、アリウス派）、ウルサキウス（シンギドンの僧正、皇帝のお気に入り）、バレンチウス（ムザムの僧正、宮廷付きの佞臣）、ビクタヴィヤのヒラリオン僧正（皇帝の最大の強敵）、エフライム（老人）、ビメヌス（青年）

あらすじ：アリウス派とアタナシウス派とのあいだでの神学論争、というよりガキの喧嘩が延々と続く。コンスタンティウスが「アレクサンドリアの長老アタナシウスの放逐」を命ずる勅令を下すことで到着。この会議の様子を見ながらジュリアンは意地の悪い微笑を浮かべ、心の中で凱歌を上げるのだった。

16. 紫袍（パープル）をまとうジュリアン (Julian in the purple).

舞 台：ミラノ

登場人物：コンスタンテウス、ジュリアン、エウセヴィオス

あらすじ：ジュリアン、副帝に任ぜられ、ガリア人征服を命じられる。

17. アルシノエとキリスト教徒 (Arsinoe and the Christians)

舞台：アテネ、ローマ

登場人物：アルシノエ、ミルラ、ホルテンシウス、アナトリウス（裕福な

ユリアヌス帝の変貌

ロドスの商人の子, 禁衛の楯兵隊の百人隊長, エピキュリアン), エヴァンチヌス (古い名門の貴族フリウス家の末孫), ジジムス長老 (エヴァンチヌスの師)

あらすじ: アルシノエの作った『ブルトゥスの首を持てるオクタヴィウス』という彫刻が皇帝侮辱の嫌疑をかけられたが, 幸いも罪には問われず彫像が破壊されるにとどまる。後見人のホルテンシウスが財務官に就任するにともないアルシノエはローマに移り, パラチノの丘の近くに居を定める。ガリアにあるジュリアンへの想いは已みがたく重病に罹る。回復期に彼女はミルラ, アナトリウス, エヴァンチヌスと連れ立って, ローマ郊外の墓窟 (コルンパリウム) を訪れる。唐突にエヴァンチヌスの母親が現われジジムスと言ひ合いになる。エヴァンチヌスの母親の密告により「皇帝の敵たる同一体の宣伝者達 (アタナシウス派)」を捕縛しようとする兵士を逃れ, 四人は人事不省のミルラを連れてどうにか家に辿り着くのだった。

18. 戦うジュリアン (Julian in battle)

舞 台: ガリア地方

登場人物: アラガリス (サルマチア人=ローマ兵), ストロンビックス (シリア人=ローマ兵), エヴェルス將軍, ジュリアン (二十六歳), フノドマール王 (アラマンニ人), アゲナリックス (フノドマール王の甥)

あらすじ: ライン河の近く, トレス・タベネルの要塞とアルゲントラトゥムの間にある沼地を, アラガリスとストロンビックスがローマ軍の主力の陣地を目指して歩いて行く。ローマ軍の本営には「皇后エウセビウスの庇護によって, ミラノで副帝の称号を受けた」ジュリアンが, 蛮族 (アラマンニ人, フランク人, サクス族, シカ

ユリアヌス帝の変貌

ムブル人, ゲルール人, ブルグンド人, バターフ人, サルマチア人)
討伐の指揮を執っている。アルゲントラトゥムの戦いは苦戦を
強いられたが, エヴェルス將軍の機転によって勝利を得る。兵
士たちの間に副帝への賛嘆の声が響き渡るのだった。

19. ミルラの死去 (The passing of Myra)

舞 台: ナポリからほど遠からぬ保養地バイエ

登場人物: ミルラ, アルシノエ, エヴァンチヌス, 長老チジムス

あらすじ: アルシノエは重篤なミルラをナポリで静養させる。懸命な介護
にもかかわらずある日ミルラは眠るように亡くなる。アルシノ
エは彼女の墓石に「Myra, vivis(ミルラよ, 汝は生きてあり)」と
刻む。ミルラの希望だった砂漠行きをアルシノエが決意した,
まさにその日にジュリアンからの謎のような短い手紙が届く。
「…余の憎しみは強し。されど余の愛は更に大なり。獅子が驢
馬の皮を捨つる日は近かるべし。されど猶暫しの間は彼のガリ
ラヤ人の言へる如く, 鴿ごとく清く蛇のごとく賢しからん」。

(19. ジョンストン版には記載なし。)

(20. ミルラの死去 (The passing of Myra) ⇒訳本では 19, 訳本の 20 に相当する
部分がジョンストン版では欠落。トレンチ版 = authorized edition にはあ
るが, 見出しなし。したがって本書の底本はトレンチ版ということになる)。

20. ? ? ? ? ?

舞 台: セーヌ河畔のパリジス・ルテチア (現在のパリ)

登場人物: ジュリアン, ヘレナ

あらすじ: かつては「Victorinus(小さな勝利者)」と呼ばれていたジュリア
ンが, ガリア地方でアルゲントラトゥム, プロコマグム, トレ
ス・タベルネ, サリゾン, ネメト, フィンギオネス, モグンチ
アクムなど旧ローマ帝国領土を奪還するに及んで, 宮廷での

ユリアヌス帝の変貌

ジュリアンに対する感情は恐怖へと変化していった。兵士たちは彼を神のごとく敬った。ジュリアンはこの戦勝がオリンピアの神々のおかげだと考えながらも、教会への参拝は継続し、ログヌス河畔の町ヴィエンスでは故意に盛大な祈禱式に参列した。冬営地パリジス・ルテチアで彼はヤムブリコスからの書簡を受け取る。またガリア出征前に無理やり結婚させられた皇帝の妹ヘレナと会う。

21. 軍隊, ジュリアンを垂載 (The army declares for Julian)

舞 台：同上

登場人物：ジュリアン, デセンシウスとルテチヤ (宮廷から派遣された官吏), ノゴダレス (エフェソスのマクシムスの弟子=魔術師), エレウシスの秘法修道院の祭司, ドロテウス僧正

あらすじ：アルгентラトムの戦勝から一年以上経過後、デセンシウスが宮廷から重大な要件を帯びた親書を持参する。コンスタンティウスは対ペルシア戦で連戦連敗、それに対してジュリアンはガリア討伐で連戦連勝、それを妬んだコンスタンティウスは偽の『戦勝報知』を町中に配布したり、亡き妻エウセヴィアを恨んだりしたあげくに、ジュリアンから精鋭部隊（ヘリル人、バタヴィア人、ベトゥラント人、ケルト人など）を対ペルシア戦のために引き抜こうとする。

それを知った兵士の間には動揺が走り、ついには暴動へと発展する。その間ピタゴラス派の長い白衣姿のジュリアンは、魔術師と祭司に運命を占ってもらおうとするが結論は出ず、『微術上の矛盾について (On the Contradictions in the Auguries)』という本を探しに書庫へ向かう途中で、ヘレナの死を告げる僧正に出会う。押しかける兵士の群れを眼前にしたジュリアンは、も

ユリアヌス帝の変貌

はや一切の迷いを捨て「勝ち誇ったような明るい顔」していた。コンスタンティウス追放を叫ぶ兵士たちに自重を促すが、最終的には兵士たちが掲げる楯の上で「ジュリアン陛下万歳！ Divus Augustus(神の如き皇帝) 万歳！」の声を聴くのがだった。

22. コンスタンティウスの死 (The death of Constantius)

場 面：アンチオキア， キリキヤ， モプスクレネ

登場人物：コンスタンティウス， エウセヴィウス（宦官）， ニムフィジアン（アリウス派の長老）

あらすじ：ジュリアン討伐に向かうコンスタンティウスの軍勢はヒッポケフィルス， キリキヤのクルススを通りクウルス山麓のモプスクレネを目指す。途中でコンスタンティウスは何度も眩暈に襲われ， 夜は悪夢にうなされる。明日はコンスタンチノーブルに向けて出発というその日に， 急使が二日後にジュリアンがコンスタンチノーブルへ通じる大羅馬街道に乗り出す手筈との旨を知らせる。エセヴィウスと二人きりになったコンスタンティウスは洗礼を受けようとする。洗礼のための道具が整わないので「銅の水盤」を使う。エセヴィウスが差し出す蠟板と銅の棒でコンスタンティウスは「『ジュリアン』という名前の最初の二三字を書いた」。三日間苦しんだ末にコンスタンティウスは亡くなる。最後まで付き添っていたのはエウセヴィウスだけだった。

23. ジュリアンと十字架 (Julian and the cross)

場 面：イリリヤとトラキアの国境にあるスッコス峡谷付近の洞窟（太陽神ミトラの祭殿）

登場人物：ジュリアン皇帝， マクシムス（魔術師）

あらすじ：ジュリアンは上記祭殿でミトラの秘術を受ける。陣屋に戻ると

ユリアヌス帝の変貌

コンスタンティウス死亡の知らせがある。紫袍をまとうジュリアンは全軍の前で「我子らよ！我等の労苦は既に終りを告げた。諸子は我等に此の勝利を授けた、オリムピアの神々に感謝しなければならぬ」と演説する。キリスト教徒の兵士たちの間には動揺が生じる。それにもかかわらずジュリアンとマクスムスは軍旗から十字架を奪り取り、銀のミトラ像と取り換える。ジュリアンは軍旗の前に跪き、銀像に向かって両手を広げながら叫んだ。「神々の王たる万能の太陽よ光栄あれ！今より皇帝は永遠なるヘリアス——光の神、智の神、歓びの神、オリムピアの美の神を拝するであらう！」「最後の異教の祭司たる皇帝」を見詰めながら兵士のひとり「反基督（アンチクリスト）」と呟くのだった。

第二（編）部

1. 競技場にて (In the Hippodrome)

舞 台：コンスタンチノーブル

登場人物：ストラニカ(元元老官の未亡人)、ゼフィリヌス(使徒会堂の副助祭)、クローカラ(女騎手)、ミルミロン(闘技者)、グニフォン(クローカラの育て親、キリスト教徒)、ゾチック(奴隸)、フォルメナ(着類屋)

あらすじ：グリフォンとゾチックは連れだってディオニソス神殿の掃除に向かう。その途上彼らは、コンスタンチヌス・フォルムで「アポロ像にコンスタンチヌス大帝の首を継ぎ足した像」が輝いているのを見る。町中にジュリアン皇帝の肖像画があふれている。

2. 反キリスト (Antichrist)

舞 台：同上

ユリアヌス帝の変貌

登場人物：ジュリアン、オリバシウス（アレクサンドリアの医師、マクシムスの弟子）、その他大勢

あらすじ：酒神（バックス）の行進の先頭にたつジュリアンは、アンチオキア市民の乱れた行状に落胆する。ディオニソス神殿の裏手で皇帝の衣装を脱ぎ捨て、ピタゴラス学派の白い上衣（チュニック）に着替えたジュリアンは、親友のオリバシウスに胸の内を打ち明ける。「…私は朝よりも晩が好きだし、春よりも秋が好きなのだ。私は去り行くものが懐かしい。萎れかかった花の匂いが慕わしいのだ。どうも仕様がな。神々がそんな風に創造されたのだ。私にはあの甘い憂愁が必要なのだ。…過去のもは現在の一切よりもより美しい。追憶は希望よりも、私の魂に対して一層大きな権力ちからを持っているのだ…」。さらに「人民を支配する人は詩人以上でなくてはなりません」「新生活の創始者」たれと忠告するオリバシウスにたいしてジュリアンは、「新！新！…ガリラヤ人も同じ様に古き聖物を蹂躪して、新しいものを求めて居る。…私の滅亡は私の勝利なのだ」、アンチクリスト「滅びしものに栄あれ、敗れし者に栄あれ！併し滅亡する前に、我々は未だ戦はなければならぬ。私は自分の敵が軽蔑でなく、憎悪に値する者であって欲しい。…ガリラヤ人よ、お前の王国は影の如く消えるだろう。地上に於ける諸々の民よ、悦ぶがよい。私は生の報知者だ、開放（ママ）者だ、私は反基督なのだ！」と叫ぶ。

3. 僧院にて（In the monastery）

舞 台：同上、ディオニソス神殿の隣の僧院

登場人物：パルフェニウス（僧侶）、バムフィルス（僧院長）

あらすじ：パルフェニウスは絵をかくことや書物の標題の装飾が得意であった。ある日彼は聖母に抱かれたイエスの円光からサファイ

ユリアヌス帝の変貌

アの球が異教徒によって抜き取られているのに気づく。彼はディオニソス神殿に入り込みディオニソス像の目からサファイアを抉り取り、イエスの円光に戻す。部屋に戻って絵描きに没頭するパルフェニウスはいつしか異教の神々と戯れているのであった。

4. ヘケボリウスの改宗 (The conversion of Hecebolus)

舞 台：同上

登場人物：ヘケボリウス (ソフィスト、宮廷付きの弁舌の教師)、カッパドキアのケーザリウス (神学者大バシルの弟、哲学者兼医者)

あらすじ：ヘケボリスウスは一六歳のときに窃盗をはたらいてコンスタンチノーブルに逃走して以来、その時々風の吹き回しに応じてアリウス派や正教派へと宗旨替えするたびに官位の梯子を上ってきた。コンスタンチウス大帝の治世に宮廷付き修辞教師に任じられる。ジュリアンはあるとき宮中で神学の討論会を催す。カッパドキアのケーザリウスはキリスト教の弁護者として陣頭に立つ。ジュリアンはこうした研究的争論を好み、言論の自由を許した。ケーザリウスはプラトンの哲学を「狡猾に編み上げた蛇の知恵」と呼び、福音書を「無垢なる容智」と対比した。ジュリアンが「軽い憂愁の表情」で議場を立ち去ろうとすると、ヘケボリウスが唐突にジュリアンの前に跪き、自分は「陰鬱なガリラヤ人の迷信」を呪い、「オリンピアの神々」に帰依すると叫ぶ。それ以降ヘケボリウスはルビチアとパフラゴニアの大祭司 (主教) として、「多くのガリラヤ人を、希臘 (ヘラス) 教に改宗させた」のだった。

5. 粘土の器 (The vessel of clay)

舞 台：同上、ジュリアンの執務室

ユリアヌス帝の変貌

登場人物：ヘケボリウス（新主教），ユリウス・マウリクス（ルキアノスの最後の崇拜者），パピリアヌス（ローマの公民，修辞学の教師，キリスト教徒）

あらすじ：ジュリアンはアルザキウス（ガラチアの大祭司）に送る命令書を口授していた。その命令書の主旨はローマ皇帝として万民に慈悲を均霑せしめよということである。ただし「愛人主義」を自称して「憎人主義」へとひと導く基督教徒を激しく批判するものだった。朝食が金の皿に入っているのを見たジュリアンは、いつもの「土焼き皿はどうした？」と問う。奴隷が「ほんの端のところだけ」だと答えると、ジュリアンは「構わない。未だ永い間役に立つ。…わしは古い物に馴れる質なのでね。古い品物の中には、丁度古い友人の有っている様な美しさある。わしは新を恐れる，変化を憎む。…」と応じる。しばらくして先頃発せられた「ガリラヤの教師は古希臘（ヘラス）の修辞学を講義することを禁ずる」勅令に対する請願のために，キリスト教徒の教師の代表団が訪れる。パピリアヌスは窮状を訴えるが，ジュリアンは基督の教を逆手にとって断固として請願を斥ける。

6. 「われらの主よきたりませ」(Maranatha)

舞 台：同上，宮殿の中庭（アトリウム）

登場人物：エウスタキウス（セバスチヤの老僧正），ダガライフ（蛮地生まれ），ニコメジヤのエヴァンドル（偉大な教理学者，『反異教』という大草稿の作者），ユヴェンチヌス（ジジムスの弟子），プルプリウス（アフリカのドナトゥス派の僧正），レナオ（自己呵責の宗派＝シルクムセリオンに属する助祭），カイン派の人々，カッシオドロス（パレンチヌス派），プロジック（アダム派の老僧），モンタヌス派の女預言者，トリフォン（エジプトから来たバシリデス派），若きエビ

ユリアヌス帝の変貌

ファネス（イオニア諸島の一島で崇拜されている）の門弟たち、拝蛇教徒のオフィチ派、マルコス派の導師、コラルバシアン派、ファビアン派、大食宗のカルポクラチ派、淫蕩なバルベロ派、ロガチア派、ピタゴラス派のプロクルス、ニムフィジウム、エウゲニウム・プリスクス、エデシウス、「神の如き」旧師ヤンブリコス、ヘケポリウス（ジンジメーネの大祭司）

あらすじ：ジュリアンはコンスタンチウス帝の「ミラノ会議」で正教派とアリウス派が大喧嘩をしたことを思い出し、キリスト教徒間の不和を利用しようとして宗教会議を招集する。彼は「迫害や暴虐の代わりに信仰の自由を与え、コンスタンチヌスやコンスタンチウスの宗教会議の決定によって、追放に処せられたドナトゥス派、セミアリア派、マルキオン派、モンタヌス派、セシリア派、その他の異教派の帰還を許そうと思う」と側近に述べる。彼は「基督教徒を亡ぼすのに、これ以上の良法はないと信じた」のであった。

ジュリアンの思惑どおりに宗教会議は混乱を極めた——たとえばモンタヌス派の女預言者の周りには去勢僧たちが恭しげに侍づいていた、彼女はひたすら「マラン、アタ！マラン、アタ！（主来る、主来る）」と眩く——。

その有様を見たジュリアンは「老練な雄弁家」のようにキリスト教徒に向かい、彼らは些細な教義上の諍いによって「この世における最も厭わしい災厄、即ち無政府（アナーキー）を惹き起こす罪人」だと断ずる。それでも延々と続く諍いを、白い衣装の哲学者たちに囲まれて見下ろしながらジュリアンは「もしお前たちが、自分で自分を治める事が出来ないなら、これ以上の災厄を予防するために云って置く——向後わしの言葉を聴

いて、服従するがよい！」と命じる。

7. キリストとオリンピアの神々 (Christ and the Olynpians)

舞 台：同上，アウグスティンの広場

登場人物：カルケドンの僧正マリス（盲目僧）

あらすじ：ジュリアンが女神チュケに犠牲を捧げようとして広い階段を降りてゆくと、マリスが近づき群衆に向けてありとあらゆる罵詈雑言を弄してジュリアンを背教者だと罵る。それを聞いてジュリアンは「赦すことを知っているのは、基督教徒のみではないといふ事を、憶えて置くがよからう」と言って静かに立ち去る。

8. 修道院のアルシノエ (Arisinoe in the cloister)

舞 台：ボスボロスの海岸沿いの廃墟（トロイ人の旧砦）

登場人物：メロエ（エジプト女）、アルシノエ

あらすじ：ジュリアンがメロエの案内でキリスト教の修道院を訪れる。そこには黒い僧衣を着けたアルシノエがいた。ジュリアンはアルシノエに「おまえはキリスト教徒なのか？」と問い質す。アルシノエはジュリアンにたいして「あなたの神々は死人です。…あなたの慈善、あなたの巡礼宿泊所、希臘教の祭司の説教などは、一たい何の意味なのでせう？これはみんなガリラヤ人の真似でございます。古い希臘の勇士たちの知らなかった、新しい物でございます。…人間に対する憐憫は、神々にとって致命傷だからでございます」と切り返す。さらに彼女はジュリアンに「あなた方は病人なのです。自分自身の教へを受け容れるためには、余り弱すぎるのでございます。これがあなた方の——遅れてきた希臘主義者（ヘレニスト）の呪いなのでございます！…」と続ける。ジュリアンは「今お前はわしに取って死人も同じ事だから」と捨て台詞を吐いて立ち去る。

9. 神々は在らず (The Gods are not)

舞 台：アンチオキア，アポロ病院

登場人物：マルクス・アウソニウス（病院の看守長），マクシムス

あらすじ：官吏の賄賂，会計検査，官金不正使用などが発覚して落胆しているジュリアンの許に，エフェソスのマクシムスが姿を現わす。彼はジュリアンにキリスト教と異教とを調停するのはおまえではない，それは「未だ知られざる人」の任務だと言う。その「未だ知られざる人」とはマクシムスのことかと問うジュリアンに向かって，マクシムスは「わしは名を持たぬ者だ」，「今はお前の死と不死に向かって祝福する。さあ行って『知られざる人』の為に，やがて来るべき人の為に，反基督の為に亡びるがいい」と言ってジュリアンの額に接吻をして立ち去る。

10. 浴場にて (In the Baths)

舞 台：大アンチオキア（シリアの首都）

登場人物：ブジリス（穀物市場を牛耳る商人），マルクス・アウソニウス，
プブリウス・ポルフィリウス，ガルギリス，グルトゥリヌス（便所掃除人），ストロンビックス，アラガリス，バムヴ長老

あらすじ：ペルシア遠征の費用調達のために採用されたさまざまな規制措置——穀物価格の統制，奢侈・娯楽の禁止など——に対してアンチオキア市民は不満を募らせ，ジュリアンを揶揄する。それに対してジュリアンは『髭の敵 (The Bread-hater=Misopogon)』（通常は『髭嫌い』と訳されている。カヴァフィスの詩を参照——要約者補足）という風刺詩をもって応える。子供たちはジュリアンの戯画「髭の長い山羊が王冠を被っている姿」を壁に描き，ジュリアンを揶揄する歌を歌いだす。

そこを通りかかった教会の牧師らしき人物はお伴の奴隷にこ

ユリアヌス帝の変貌

う語りかける。「真理は小児の口から出るものだ。パッカとキイの時代の方が、我々の生活が楽だじゃないか?」「カッパとキイとは何の事でございます?」「分からないか? 希臘文字のカッパはコンスタンチウスと云ふ名の頭文字だし、キイは基督の頭文字だ。コンスタンチウスも基督も、アンチオキアの人民に、少しも害をしなかった。様々な野師同然の哲学者共とは違ふ…」そしてこの会話を聞きつけた酔っぱらいは「カッパとキイ万歳!」と叫ぶ。浴場の向かいにある酒場では、かつてガリア征伐に参戦したストロンビックスとアラガリスがジュリアン批判を繰り返す。そこへ砂漠からやってきたバムヴ老人が現われる。

11. 聖人と副帝 (カエサル) (Saints and Caesar)

舞 台：同上

登場人物：バムヴ、サリユスチウス・セクンドゥス (東方総督)、オリバシウス

あらすじ：カルボニアのポレアという砂漠に住む老キリスト教徒バムヴがジュリアンによる迫害の知らせを聞いて、アンチオキアに出かけてきて、激越なジュリアン批判の演説をする。駆けつけてきたサリユスチウスが解散を命じるが、群衆はいつこうに怯むことなく「憶えておくがよい、羅馬帝国は、ただわれわれ基督教徒の髓忍によって保たれてをるのだぞ!」というバムヴの演説に喝采を送る。そこにジュリアンが登場して「群衆を追い散らせ! 暴徒を掴まへろ!」と命ずる。オリバシウスの忠告にも耳をかさずジュリアンは狂気に駆られたように、「わしが神々の恵みによって皇帝である間は、お前たちガリラヤ人も、わしに従わねばならぬぞ! お前たちがわしの髭

ユリアヌス帝の変貌

や、服装を笑ったからとて、構ひはせぬが、しかし羅馬の法律を笑ふ事は許されぬ。よいか、憶えて置け。わしがお前たちを罰するのは、信仰のためではない。叛逆のためだ。さあ、暴徒を縛り上げろ！」と命ずる。死を覚悟したキリスト教徒たちはいっこうに怯むことなく自ら殉教の道を選ぶ。縛り上げられたバムヴは「殺せ、われわれをみんな殺せ、羅馬人も！さうすれば、われわれは却って数を増して行く。鎖はわれわれの自由だ、弱味はわれわれの力だ、死はわれわれの勝利なのだ！」と叫ぶのだった。

12. アポロンの神殿 (The shrine of Apollo)

舞 台：オロンテス川の下流にあるダフネの森、アポロ神殿

登場人物：ゴルギウス（アポロ神殿の大祭司）、エウフォリオン（聾啞の少年、勤行の助手）、プリスクス（禁欲派、ピタゴラス派）、ユリウス・マウリクス（懐疑派）、サチュスチウス・セクンドゥス（賢人）、リバニウス（比類なき虚栄家で修辞学者）、ヘケボリウス（以前のキリスト教徒、アスタルテの大祭司）、キリスト教徒の長老、土地を没収された老夫婦

あらすじ：ジュリアンはアンチオキアの住民が今でもアポロの祭典を行っているかどうかを確かめようとして、独りでダフネの森を訪れる。しかしそこにいたのはゴルギウスとエウフォリオンだけだった。近くではキリスト教徒が殉教者バピラスの遺骸に祈祷を捧げていた。これは兄ガルスがバピラスの遺骸をアンチオキアからここに移送して立派な廟を建立して以来続いていた。ジュリアンの後を追ってきた側近たちはジュリアンのただならぬ様子を目にして驚く。彼は側近のひとりに遺骸を拜んでいるキリスト教徒を連れてこいと命ずる。そして長老に「明日の晩

までにアポロの森から、死人の骨を片付けるよう」と命令する。さらにキリスト教の内輪もめ——たとえば同一体（ホモウジオス）と類似体（ホモイウジオス）とわずか一字の違いのために、野獣の如くかみ合うこと——や教義上の自己矛盾を激しく論難する。老夫婦が国庫に取り上げられた土地・住宅の返還を哀願するのも一顧だにしないジュリアンを見て、側近たちは「明瞭に発狂の兆だ！」と陰口を始めるのだった。

13. 神殿、燃ゆ（The burning of the shrine）

場 面：ダフネの森

登場人物：アラガリス、ストロンビックス、サリュスチウス（東方総督）、リバニウス、サチュスチウス・セクンドゥス

あらすじ：アラガリスとストロンビックスがアポロ神殿に放火する。ジュリアンはサリュスチウスとペルシア遠征について密議を凝らしていた。暴走するジュリアンを押し止めようと賢人たちが諫言するが、ジュリアンは頑として予定を変えようとしない。そのときダフネの森が燃えている有様が窓越しに見える。ジュリアンは五十人の兵士を引き連れダフネの森に駆けつける。ゴルギウスはキリスト教徒によって石で殴られ虫の息、エウフォリオンも瀕死の状態だった。それにもかかわらずゴルギウスはアポロ神殿の宝物をしっかりと握っていた。怒りに駆られたジュリアンはキリスト教徒の「行列に飛び込んで、追い散らし、バビラスの遺骸を取めた棺を引っくり返して、死骸をばらばらに撒き散らそう」とする。そこにサリュスチウスが駆けつけ「陛下、武器を持たぬ者を襲ふのは宜しうございません。お気をお鎮め下さいまし！…」とジュリアンを押し止める。我にかえったジュリアンは平静な調子で「よいか、乱暴を働いた者や、アポロの

ユリアヌス帝の変貌

神殿に火を放った者は、容赦なく刑罰に処するぞ。…しかしわしは今お前たちの傍を立ち去らうと思ってる。ほかでもない、波斯遠征の途に上るのだ。もしわしが神々の加護によって、勝利者として凱旋することが出来たら、それこそお前たち謀反人は禍だ！ナザレの大工は禍だ！…」と演説する。その瞬間、燃え上がった神殿の屋根がアポロ像の上に崩れ落ちた。その轟音をかき消すようにイスラエルの神を讃える古いダビデの頌歌が勝ち誇ったように夜空に昇ってゆくのであった——「偶像に仕へてこれを誇る者を恥じしめよ。すべての神々をして主の前に額づかしめよ！」

14. 寺院再建 (The building of the temple)

舞 台：シルセシウム（ディオクレチアヌス帝がメソポタミアの国境に築いたローマ最後の要塞、アボル川とユーフラティス河の合流点にある）

登場人物：イタリアからの急使、（前ブリタニア総督アリウピウスの書簡を携えた）エルサレムからの急使、オリバシウス、サリュスチウス、アナトリウス（アルシノエの崇拜者、禁衛隊の隊長）、

あらすじ：三月五日ジュリアンは六万五千の兵を率い波斯遠征の途につく。北部方面へはプロコピウスおよびセパスチアヌス指揮下の三万の兵から成る別働隊が派遣された。彼らはアルメニア王アルサキウスと合流して、チグリス川の沿岸にあるクテシフォンの城壁の下で本隊に合流する計画だった。本隊は四月初めにシルセシウムに到着した。川には浮橋がかけられ、ジュリアンは翌朝国境を越えるように命令した。

国境越えの準備で疲れ切ったジュリアンは寸暇を惜しんで『反基督教 (Against the Christians = ガリラヤ人論駁)』と題する浩瀚な哲学的著作の執筆に励んだ。そこに二人の急使が到着し、

ユリアヌス帝の変貌

イタリアからの急使によれば、小アジアの大都市ニコメディアが地震によって大被害を蒙り、その余波はコンスタンチノーブルにまで及び人心は動揺しており、巫女の預言書によれば今年中の国境越えはしてはならないとの報せであった。またエルサレムからの急使によれば、アリウビウスに託したソロモン神殿再建の計画に着手するや、奇妙な現象——火玉が飛び交い、火炎が吹き出す——が続発して計画が頓挫しているとの報せであった。科学者オリバシウスは「それは奇蹟でもなんでもない、廃墟にたまったガスが発火しただけだ」と説明する。

そこへサリュスチウスが入ってきて「神託の鶏」によれば明朝の国境越えは凶兆だと伝える。ジュリアンは「どの様な神託の鶏もわしを脅かす事は出来ない——水も、火も、地も、天も、神々も矢張りその通りだ！もう遅い。籤は抽かれたのだ。…」と言い切り、兵士たちに向かって「…予はスケヴォラ、クリチウス又はデキウスの子孫——即ちすべての偉大なる英雄勇士と同じ様に、羅馬の為に死ぬる事を幸福とする。諸子よ、勇気を奮い起こして、強者は勝つの一事を記憶して貰ひ度い！」と演説する。これを聞いた兵士たちは「勇敢なる皇帝陛下万歳！」と叫ぶのだった。

15. ユーフラティス河のほとりで (On the Euphrates)

舞 台：アッシリアの棕櫚林、ナガル・マルカ（王の河、チグリスとユーフラティスをつなぐ運河）、ペルザボルの要塞、マオガマルキの要塞、クテシフォン（波斯の南都）

登場人物：ダガライフ、ホルミズダス、セクンジヌス、ヴィクトル、サリュスチウス（老巧な將軍たち）、エトリアの占い師たち、オリバシウス

あらすじ：ユーフラティス河に沿って進軍するローマ軍はマセプラクト付近で初めて波斯軍と遭遇するが、彼らは易々と退却する。雨のように降りしきる矢のなかをさらに進軍するローマ軍の眼前には、波斯軍が人工的に起こした洪水が迫る。泥水をかき分けながらジュリアンは先頭に立ち、翌朝ペリボザルの要塞を取り囲む。激戦の末これを攻略したローマ軍はさらに前進して、森の木陰で二日間の休息を得る。その後さらに進軍してチグリス河畔のマオガマルキに到る。要塞包囲戦が膠着状態になるとローマ軍は要塞の麓に地下道を掘り、そこから要塞内に入り込み城門を開き、マオガマルキの町を占領する。その後ローマ軍は波斯の南都クテシフォンに近づく。ジュリアンは波斯軍が埋め立てた運河を掘り返して、艦隊をユーフラティス河からチグリス河に移させる。

翌日の晩ジュリアンは軍事会議を開催、今夜直ちに軍隊を渡河させクテシフォン城攻撃を命ずる。将軍たちは口々に異議を唱えるが、ジュリアンは波斯軍が放った火矢で船が燃えるのを「先発隊の勝利の合図」と偽って、突撃を命ずる。夜明け前にはローマ軍は対岸の高地を制圧したが、明け方にクテシフォン城内から市外の平野へ繰り出す波斯軍を見つけた。そのなかには巨大な戦像もいた。戦いは十二時間に及んだが「戦闘はトラヤヌス、エスパシヤヌス、チトゥス等の諸英王以来、羅馬軍が嘗て覚えがない程の、華々しい勝利を以て終わった」。

翌朝ジュリアンは感謝の標に白牛十頭を犠牲に捧げることにする。ところが十頭中九頭が斃れ、一頭は逃げ出してしまう。儀式は中止になりジュリアンは贅卓（にえづくえ）を打ち壊そうとする。将軍たちのなかには彼を諫めたり、あるいは「皇帝

は発狂した」と嘯いたりする者もいた。ジュリアンは手を天へ差し伸べ声高にこう叫ぶ——「善良にして意久地なき神々よ、わしは自分の内心に潜んでいる永久の悦びに懸けて誓う。汝等がわしを棄てた様に、わしも汝等を棄てる！オリムピアの幻影よ、わしは只一人で汝等を敵として戦はう！…」。オリバシウスに促されてジュリアンは天幕のなかで休息するが、兵士たちの動揺は収まらずキリスト教徒たちは暗躍し始めるのだった。

16. 艦隊炎上の内幕 (How the ships were burned)

舞 台：クテシフォンの天幕

登場人物：アリファス将軍、アルタバン（サポール王の陣営からの脱走兵）、
ヴィクトル将軍

あらすじ：疲労と重責のために悪夢にうなされるジュリアンに、アリファス将軍到来の報せがある。彼はアルメニア王アルザキウス、プロコピウスおよびセバスチアヌスに率いられた三万の援軍の動向を探るため北方に送られたのであった。しかし彼がもたらしたのは悲報だった。「皇帝は味方の為に亜細亜の奥で見捨てられたのである」。

そこへアルタバンという名の波斯の貴族と称する者がジュリアンの前に連れ出される。彼はサポール王によって拷問を受け片輪同然の姿だった。彼はサポール王に復讐するためにローマ軍をエクバタナ（波斯王の夏宮所在地）に案内すると申し出る。将軍たちはアルタバンの言葉を疑い、ジュリアンも艦隊の処置に困惑するが、結局はアルタバンを信じてヴィクトル将軍に戦艦を燃やす命令を発する。

その後ジュリアンは軍事会議を招集し、自分の計画を説明する。だが将軍たちは口々にその計画の無謀さを非難し、サポー

ル王の講和を受け容れローマに凱旋するようにと説得する。まさにそのとき艦隊炎上の叫び声が聞こえてくる。同時にアルタバシオン逃亡の報せが届く。実は彼はクテシフォンの収税吏であり、町の危難を救うために姦計を企んだのであった。動揺する兵士たちをしり目にジュリアンは「どうでもいい、どうでもいい、…奇蹟は成就する！今でなければ又後で現はれる。わしは奇蹟を信ずるのだ！…」と絶叫するのだった。

17. アルシノエの試み (Arsinoe's temptation)

舞 台：ペルシアとの国境地帯、アブザト村

登場人物：ジュリアンとアルシノエ

あらすじ：六月十六日、退却後最初の野営。ジュリアンの「前進せよ」との命令にもかかわらず兵士たち——ケルト人、スキチア人、ローマ人、キリスト教徒、異教徒、臆病者、勇敢な者——も将軍たちも前進を拒み「退却、退却」と叫ぶ。ジュリアンは支援隊との合流に一縷の望みをかけて、コルドウエナ州を経てキリオロムの方向へ帰路を取るよう命令する。ペルシア軍はローマ軍を苦しめるべく、小麦畑に火を放ち、運河の堤を決壊させて焼野原に水を氾濫させた。食糧不足と疲労のために斃れる兵士も続出した。ジュリアンは自分の食糧を兵士に分け与えるなどの措置を講じたが、前途は多難だった。彼は「只敗軍の将としてアンチオキアカタルソスへ帰って、基督教徒らの物笑となって生恥を曝す——そればかりは考える丈でも堪えられなかった」。

天幕に戻ったジュリアンが『反基督教徒』を読み返している時、背後に一人の青年が立っていた。それはアルシノエだった。彼女は修道院での別れ以来の出来事——ホルテンシウスと手を切って、財産を貧民に分け与え、砂漠の隠者たちと苦行に励む

——を語る。さらに彼女は自分が経験した「試み (temptation)」についてこう語る。荒野のなかで「白い美しい大理石の^{かけら}碎片」を見つけ、それに見惚れていると「ふと[、]雅典[、]の事や、自分の青春や、藝術や、あなたの事などを思ひ出して、まるで目が醒めた様な気がしたのでございます。其時私は娑婆へ還って、神に依って創られたもの——つまり藝術家として生き又死なうと決心しました。此の時分ジム長老が、何でも私があなたと基督を和解させたと云ふ、意味深い夢を御覧になったのでございます…」。

それをじっと聞いていたジュリアンは「で今お前は基督を憎んでいるのか、アルシノエ？」と問いかける。アルシノエは聖母マリアの子イエスは「幼児や、自由や、宴の悦びや、白い百合の花を愛しました。彼は生を愛したのでございます！」と答える。そして荒野の修行僧たちこそが「背教者」なのだ、「あなたは『彼』を愛している」と諭し、「一體あなたは誰に叛逆を企てなすっているのでせう？一體基督があなたの敵でせうか？あなたの口が十字架に上った人を呪って居る時、あなたの心は『彼』を渴望してゐるのです。あなたは『彼』の名を敵として戦つていらっしやい乍ら、却つて死んだ口で『主よ、主よ！』と繰り返してゐる者よりも、基督の心に近いのでございます。かう云ふ人達こそあなたの敵なのです。決して基督じゃではありません。何故あなたは基督教の僧侶より以上に、自分で自分を苦しめるのでせう？…」と心を込めて語りかける。

それにたいしてジュリアンは「基督教徒の奸計などは一から十まで承知している」と言い切り、「お前は『彼』を斥ける事が出来なかったが、『彼』の敵でない者は、わしの友となる事

が出来ないのだ。…（毒蠅に殺された獅子のように）わしの最後も此通りだ。羅馬皇帝に対するガリラヤ人の勝利も此通りなのだ」。

七月二十日、ローマ軍はドゥルス河の畔でしばしの休息を取る。二十四日の朝、付近の丘の上に不穏な動きを感じたジュリアンは集合の喇叭を吹き鳴らすように命ずる。円形の防御陣を張ったローマ軍はその夜一睡もしないまま見えざる敵の来襲に備えるのだった。

18. 最後の戦い (The last battle)

舞 台：同上

登場人物：ジュリアン、ヴィクトル、その他大勢

あらすじ：日の出ともに二万を下らぬペルシア軍が攻め寄せる。それは七月二十日の朝のことだった。ローマ軍は「中央部の内へ湾曲した、新月の様な特別隊形を編成した。此の巨大な半円形の尖った二つの端が波斯軍に食ひ込んで、両翼から挟撃しようとするのであった。右翼の方はダガライフが指揮し、左翼はホルミスダが、中堅はジュリアンとヴィクトルが引率する事になった」。ジュリアンは軽い絹の上衣（チュニック）のままで、甲冑も兜も着けずに、円形の楯を取って紫の寛袍を羽織るとそのまま馬に飛び乗った。

ペルシア軍は戦像を繰り出しローマ軍を蹴散らそうとする。一部はその巨大さに恐れおののき潰走し始めた。それはキリスト教徒たちだった。ジュリアンは「臆病者！貴様らは祈祷するより外能^{のう}がないのか！…」と叫びながら、トラキアの射手やパフラゴニアの投石手に向かって「像の足を狙え」と指示する。一本の矢が印度像の眼に命中したのをきっかけに像群は潰走し

ユリアヌス帝の変貌

始める。だがこれを予測していたペルシア軍は自らの手で戦像を殺戮し、地上戦に持ち込む。ローマ軍は左翼ではペルシア軍の鉄騎隊に苦戦し、左翼では斑馬^{ゼブラ}が引く車隊に苦戦していた。左翼支援に駆けつけたジュリアンの奮闘と灼熱の太陽のおかげでさすがの鉄騎隊の猛攻にも衰えがみえ、ついには混乱に陥った。「皇帝は思はず勝利の叫びを放った。彼は逃げて行く敵を追い掛けて、味方の軍が遅れたのに気付かなかった」。

ジュリアンに続くのはヴィクトルと少数の護衛兵だけだった。深追いするのを止めようとするヴィクトルを振り切ったジュリアンの紫袍^{パープル}に気付いた駱駝に乗ったサラセン人の少年は、「マレク！マレク！（アラビア語で「王！王！」）と叫びながら、ジュリアン目がけて槍を放つ。その槍はジュリアンの「右手を掠めて一寸皮に掠り傷をつけ乍ら、肋骨の上を辿って肝臓の下へ突き立った」。刺さった槍をジュリアンが抜き取ろうとすると指が切れ、血が迸り出るのだった。

19. ジュリアンの死 (The death of Julian)

舞 台：同上

登場人物：オリバシウス（侍医）、ヴィクトル、ジョヴィアン將軍（ヨウイアヌス＝ユリアヌスの後継者、364年2月17日ガス中毒で死亡）、近臣たち、アマヌス・マルセリヌス（宮廷付きの楯隊の百人隊長、後の歴史家）

あらすじ：ジュリアンは天幕に運ばれ、人事不省の状態で行軍用の寝台に載せられる。傷の具合を確かめたオリバシウスは絶望的だというように首を振る。意識が戻ったジュリアンは「見ろ、わしは大丈夫だ…早く楯を、剣を！馬を曳け！」と叫ぶ。ヴィクトルが楯と剣を渡すと、ジュリアンはよろよろと二歩歩くと、傷口

が開き武器を落としてオリバシウスとヴィクトルの手に倒れ掛かり「駄目だ…ガリラヤ人！ お前が勝った！」と目を空に上げながら叫ぶのだった。

意識が混濁してきたジュリアンは譭言にガリラヤ人への呪詛の言葉を吐き、太陽が昇るのを待ち焦がれる。そのときペルシア軍の将軍と二人の王子の敗走や、五十人の高級指揮官の戦死の報せが届く。だがジュリアンはそれにはまったく無関心だった。彼の死を覚悟した近臣たちは無難なジョヴィアン将軍を帝位に就けようとする。行軍日誌を記していたアミアヌスは臨終の言葉を書き留めようと身構える。ジュリアンの最期の言葉はこうだった。

「前略…今わしは長患いで死にもせず、首斬人や悪者の手で非業の死も遂げず、功業の半ばにして、青春の花盛りに戦場で斃れる事が出来たのを、永久なる神に向かって感謝する…皆の物、古い容智に心を固められた希臘主義者（ヘラニスト）は、どういふ死に方をするかと言ふ事を、わしの敵にも味方にも話して聞かせて呉れ」。

周囲の者たちは後継者の指名を望んだが、ジュリアンは意に介さず「誰でも同じだ。すべて運命が解決して呉れる。それに抗つては不可ない。基督教徒共に凱歌を挙げさせて置け。我々は又後で征服する——我々には太陽がついて居るのだ！見ろ、あれがさうだ、あれがさうだ！…」。ヴィクトルが差し出す末期の水を飲んだ後ジュリアンは「みな悦べ！死は太陽だ…おお太陽（ヘリオス）よ、私はあなたと同じなのです！…」。これがジュリアン最後の囁きだった。皇帝の顔は太陽の輝きのなかで、さながら眠れる神の顔に見えたのだった。

20. 「無垢」と「金色の火花」(Innoxia and Mica Aurea)

ユリアヌス帝の変貌

舞 台：アンチオキア

登場人物：アナトリウス（楯隊の隊長，行軍中にアミアヌスと友人になる），アミアヌス，審問官マルクス・アウソニウス，ユニウス・マウリクス（アナトリウムの知り合い），審問官ガルギリウス，シクムオウリクス（正直な奴隷），テオドリト（宣教師），「無垢」と「金色の火花」（ブリタニアから連れてこられた雌熊）

あらすじ：ジョヴィアン皇帝がペルシア国王サポールとの「国辱的」講和を講じてから三ヶ月が経った。ローマ軍は疲弊しきってアンチオキアに辿り着く。アナトリウスとアミアヌスはアルシノエの招きに応じてイタリアのバイエ付近にある閑静な別荘に赴く途中で，アンチオキア二三日間立ち寄る。ちょうどその頃アンチオキアでは，ジョヴィアン皇帝の即位式と軍の凱旋式を兼ねて盛大な祝祭が催されることになった。

晴れ渡った秋空の下，アンチオキア市民は祝祭に湧き立ちキリスト教徒はローマ軍の敗北も意に介さず，ジュリアン皇帝の死が真実だと分かると悦びのあまり気ちがいのようになった。群衆の歓喜を厭わしく思ったアナトリウスではあったが，ふと好奇心を覚えて街中に出かける。路上では「善良にして偉大なるジョヴィアン陛下万歳！」あるいは「死んだ死んだ，あの猪めが死んだ，エデンの園を荒らした奴が死んだ」，「ジュリアンが死んだ，悪人が死んだ」と絶叫する群衆の声が響く。

その様子を眺めながらアナトリウスの胸には何とも言えない憂愁が過るのであった。シンゴン通りに沿って中央教会に近づくと，それまでキリスト教には無縁だった知り合いが続々と改宗して教会に入ってゆくのが見える。シクムオウリクスは涙ながらにジュリアン帝の時代に教会を破壊した廉で投獄されそう

だと、ガリギリスに訴える。シクムオウリクスが皇帝が変わるたびに信仰をコロコロと変えてきことを聞いて、ガリギリスは「もう今度こそ大丈夫、変わる事はないよ！」と宥める。

教会では有名な若い宣教師が説教台の上で熱っぽくキリストの教えを説いているが、聴衆はうわの空で見世物（サーカス）の開始時間ばかり気にしている。

力士の浅黒い身体が「無垢」と「金色の火花」の爪に押さえつけられるのを目の当たりにして、群衆は狂気のように沸き立つ。それは「(猛獣の咆哮よりも) 尚一層粗野な人間の咆哮」だった。アナトリウスは帰宅後もアンチオキアの喧噪に悩まされながら、「ガリラヤ人、本当にお前は勝った！」と苦笑するのだった。

21. むすび (Conclusion)

舞 台：イタリアのバイエ付近にある閑静な別荘

登場人物：アナトリウス、アミアヌス、アルシノエ

あらすじ：アンチオキアのセレウキア港から出航した商船はエーゲ海の島々の間を縫ってイタリアのクリート島へ向かう。その船上にはアナトリウス、アミアヌス、アルシノエの三人が乗船していた。アナトリウスは海を眺めながらエスキルの『盛に笑う海 (the much-laughing sea)』という句——「盛に笑う海よ、俺の魂を受け入れて浄めてお呉れ！ (Oh much-laughing sea, take me, and wash my soul!)」を思い起こす。アミアヌスは『行軍日誌』やジュリアンの生涯に関する手記を整理しながら、キリスト教の高僧アレクサンドリアのクレメンスが書いた『色様々な絨毯 (Stromata=Variegated Carpet)』を読んでいる。アルシノエは蠅で小さな彫像を作っている。彼女は疾うに尼僧の服を棄ててし

まっていた。背教者と罵られながらも彼女は祖先が遺した財産のおかげで迫害を免れていた。

バイエから程遠からぬナポリ湾の岸には、ミルラが最後の日を送った別荘があった。彼ら三人はアンチオキアの喧噪を逃れて、ここで静養しようとしていた。バイエを目指す船が小さな島の傍を通過する際に、牧羊神の大理石像の傍らに若い男女が座っているのが見えた。アナトリウスはその光景に感動してアルシノエに語り掛けようとするが、アルシノエは次作の彫像をじっと見詰めて、心ここにあらずの風情だった。彫像の顔には「此世ならぬ憂愁」が浮かんでいた。

アナトリウスが「それは誰ですか？」と尋ねると、アルシノエは「そんな事はどうでもいいじゃありませんか」と微笑みながら小さな声で答えた。それから暫し考えてジュリアンは一方では「ミトラ・ディオニソス」のように無慈悲で恐れられなければならないが、他方では「ガリラヤのイエス」のように慈悲深く謙抑でなければならいと、独りごとのようにつぶやく。それを聞いてアナトリウスはそれは無理だと答え、さらに「あなたは羅馬と希臘を襲った夷狄の間の中で、亡びずに残るものがあるとお思ひですか？」と問いかける。アルシノエはこう叫ぶのだった。

「さうです。未来は私達の中にあるのです。私達は悲しみの中にあるのです。ジュリアンの言った様に、私達は汚辱と沈黙の中に、すべての人から疎まれながら、淋しく終まで忍ばなければなりません。後に来る人々が新しい炬火を点ける火種を残す為に、灰の中に最後の火花を隠さなければなりません。…後略」(この言葉はルクレティスの「死すべき人間たちはたがいに生命

ユリアヌス帝の変貌

を受け渡す。あたかも走者が^{たいまつ}炬火を受け渡すように（『事物の本質について』）を想起させる——要約者補足）。

アミアヌスはクレメンスの著者を押しやって二人の会話に耳を傾ける。アナトリウスは彼に「一体君は基督教徒か希臘主義者（ヘレニスト）か？」と問いかける。アミアヌスは「僕は自分でも知らないのだ」と答える。さらにアナトリウスは「どうして羅馬帝国の歴史を書かうとするのだね？…君は後世の人に、自分の進行を知らせないで、迷はせて置く積りなのかね？」と問い詰める。それに対して歴史家は「彼等にとってそんな事を知る必要がないのだ。両方共に対して公平でありたいと云うふのが、僕の希望なのだ。僕はジュリアンが好きだった。併し僕の衡の皿は彼の方には下らないだろう。僕が何者であったかと云ふ事は、将来誰にも分からない儘で置かう——僕自身さへ決めて居ないんだから」と答える。

アミアヌスの明晰な知性を称賛するアナトリウスとアルシノエに対して彼は自分には偉大な先達があり、それはアレクサンドリアのクレメンスの著作『色様々なる絨毯（スマロマタ）』だと応じる。それによれば「羅馬の力希臘の容智は、単に基督の教へに達する道程」にすぎず、「つまり前兆、予覚、暗示」にすぎないという。「クレメンスはプラトンをガリラヤの耶蘇（イエス）の先駆者」と言っている。

これに衝撃を受けたアナトリウスは既視感に襲われ周囲を見渡す。そこには希臘を想わす風景のなかに、牧羊神が奏でる笛の音に交じって讚美歌の歌声が聞こえてくるのだった。

『『み心の天の如く地にもならせ給へ』と僧達は歌った。

牧夫の笛の澄んだ響きは基督教の祈祷の言葉と融け合って、

ユリアヌス帝の変貌

高く高く天まで昇って行くのであった。…嵐は夜と共に襲って来たのである。けれどもアナトリウスとアミアヌスとアルシノエの胸には、まるで没する事のない太陽の様に、もう偉大なる蘇生の喜びが宿って居たのである」。——完——

要約者追記：「アルシノエ」はプトレマイオス二世フィラデルフォス（愛姉王）の二度目の妻であり、実の姉の名前である。プトレマイオス朝では血統の純粹さを守るために実姉・妹と結婚する慣習があったとされる。筆者の妄想によればアルシノエ、アミアヌス、アナトリアの三人が目指すのは「アレクサンドリア」でありアルシノエはそこで「ヒュパティア」になる？

なお「辻邦夫『背教者ユリアヌス』についての書評的考察」(<http://www7.plala.or.jp/Palais6avenue/muumi-libraly-shohyou1.html>)に付されたギボン『衰亡史』、メレシコーフスキイ、辻邦夫によって描かれたユリアヌス帝をはじめとする主要登場人物の性格描写の比較対象一覧表は労作である。ただし「アルシノエ」や「アミアヌス」はエントリーされていない。